



ラストーン

～失われた都より～

6

segakiyui

1. 『運命（リマイン）』狩り

「おら！ さっさと歩け！」

平原を一人、照りつける暑苦しい日差しの中をイルファは引っ立てられている。

もっとも、周囲を囲む男達は微妙に覇気がなく、イルファを引っ立てているというよりは歩くイルファに渋々付き従っているような気配だ。

「俺が何をしたって言うんだ？ ただ、道を歩いてただけじゃねえか」

薄汚れてばさばさの髪をした丸腰のイルファは、ギロリと目を剥いて文句を言った。

「口答えするな！ 『紅（あか）の塔』の下を通るには許しがいることぐらい、旅人なら知ってるだろうが！」

「知らねえから捕まってるんだろうが！」

「口の減らん奴だな！ おとなしく歩け！ それでなくとも暑いんだ！」

怒鳴られこづかれて、イルファはそのそりのそりと歩を進める。その彼の目の前に、赤茶色の石を積み上げた塔が次第次第に大きくなっていく。かつては、辺境区の象徴、イワイツタの細く強いつと歯肉の薄い白い葉が彫られていたのだろうが、今それは跡形もなく削り取られていた。ささくれだった表面は削られた跡そのままに、粗いごつごつした粒子をさらけ出している。

それは、この塔の所有者の変化の激しさをまざまざと見せつけるものだった。

「えらく荒れた城だな」

「ああ、荒れた城だ」

イルファのことばに、からかい相手にされていた男は、そっけない、どこか寒々とした調子で応じた。

「以前はそうでもなかったんだがな...お前に言われてみると、確かに荒れた城だ」

「城主が変わったのか」

「まあな」

つい答えた男ははたと我に返ったらしく、またイルファの体をきつくこづいた。

「ほんとに口の減らん奴だな！」

「それはさっき聞いた。それに、話したのはそっちじゃないか」

「もう話さん！」

男はぐっと唇を引き締め、後は塔に着くまで無言だった。

イルファが連れ込まれた塔は、その基底部に小さな入り口を持っていた。そこから内部の細い通路に階段が刻まれ、頂上まで続いているらしい。

（内部の造りは大体『白の塔』とおんなじだな）

イルファはうんざりするほど長い、埃だらけの段々を汗だくになって上りながら考えた。

石段や壁面のそこここが欠けたり崩れたり、あるいは何とも知れぬどす黒い物で汚れたりしているのが、修復もされずに放ったままになっている。外から見るとより一層荒れた気配の塔だ。

『城は主を語る』

いつだったかレクスファ王が杯を手に話したことばを思い出した。

『城は主を語り、国を語るものだ。統治する者の居場所を見れば、何を望み、何を得ようとしているのか明らかだ』

炎に照らされた力強い穏やかな笑顔。

（確かにそうかもしれんな）

レクスファの白亜城は確かに造りとしても美しいが、何より手入れが行き届いていた。王がこまめに指示をすると言うよりは、住まう者関わる者が、その美しさを損なうまいと日々心を込めて手を入っていた。それは王への敬意であり、国を治める重責へのいたわりだった。

しかし、『紅（あか）の塔』にそんなものはない。好き放題に使い、おそらくはいずれ捨て去られるだろう気配が満ちている。この城を見る限り、『運命（リマイン）』支配のその後何が起こるか、簡単に想像がつく。

人気がなくなり崩壊した黄金都市、キャサラン。太古生物が跳梁し、人間は明日の命を望むことしかできない。

あれこそが『運命（リマイン）』が支配した後の世界というやつだろう。

『王の責務は人々の希望を背負うことだ』

レクスファ王は杯を高く差し上げて頭を垂れて祈った。

『民が、未来は素晴らしいと信じて生きられる場所を保てるように、我に力を貸したまえ』

この先は全滅するしかないと思われた盗賊王との闘いの夜。

(いかん)

旅に出てから感じたことのない淡い懐かしさが広がり、イルファは苦笑した。

(今回ばかりはやばいかもしれん)

過去を振り返るなど、しかも自分が長年仕えた王を思い返すなど、終末期にありがちな感覚だ。

「ここだ」

背中をこづきながら上ってきた男が少し息を切らせて、一つの扉の前でイルファを止めた。

塔の半分ぐらいは登ってきただろうか。

黒ずんだ金属の扉が無骨に前を遮っていた。表面にかつてあったろう紋章の浮き彫りも、叩き潰されてでこぼこしたうねりにしか見えない。

男はイルファの側を無防備に過ぎて扉に近寄る。その様を見ながらイルファは目を細める。

剣を突きつけているという優越からか、猛々しさと相反するこの緩さ。

イルファが反撃するなどとは思ってもいないのだ。旅人だと言うイルファのことばを信じていないように振舞いながら、その実旅人でしかあり得ないと考えているのは、自分達の力が圧倒的だという傲慢が底にあるせいだろう。

(突くならそれだな)

攻められるとは考えていない、その甘さを崩せばいい。

深く呼吸し、前を向く。

男はイルファに背中を向けたまま、扉の中央に下がっている丸い輪を掴んで、けだるそうにゆっくりと扉に数回叩きつけた。

ごおん、ごおん、ごおん。

重苦しい音が石の壁に跳ね返る。

扉がきしみながら内側へと開かれた。

「王よ、この者が、さきほどの旅の者です」

中は意外に広々としていた。

正面に段をつけて高くしてある場所があり、柔らかな薄絹のような白い布が天上から垂れ下がって、その場所を囲んでいる。布の囲いの中に人影が動いたかと思うと、甲高い声が命じた。

「そこへ」

「はっ」

男は雷に打たれたようにびくりと体を強張らせると、険しい顔でイルファを部屋に引き入れ、まるで正面の座から自分を守るようにイルファを前に押し出した。

イルファの前ですると布が左右に引かれていく。

布で囲まれた空間には玉座があった。塔と同じ色味の石で造られた椅子に一人の人間が座っている。

「『運命(リマイン)』!」

予想はしていたが、こうも眼前にはっきり見せつけられると息を呑む。

イルファの反応に、相手は黙ったまま瞳を光らせた。

白っぽい顔には真紅の瞳が鮮やかなほど輝いている。対照的な漆黒の豊かな髪は黒々と、肩へ胸元へ流れ落ちている。やはり男とも女とも言い切れない不思議な容貌の中で、嘲笑うように歪めた紅の唇が毒々しい。

「やっぱりここは、お前達の城になっちまった、ってことだな」

「随分ともものわかった『旅人』のようだな」

赤い唇がなお歪められて、甲高い声が殺気を満たした。居丈高な調子で続ける。

「ならば、そう易々とここから出すわけにはいかぬな。地下の牢へ押し込めておけ」

「はっ」

後ろにいた男がぐいとイルファの背中を突いた。

「かわいそうにな、妙なことを口走るからだ」

全くかわいそうだとは思っていない口調で囁き、男は薄笑いをイルファに向ける。主の前でのこの無作法さ、統制がとれていないのがばればれだ。

イルファはふてぶてしく笑い返して、玉座の相手に視線を投げる。

「後で泣きを見るぜ、『運命（リメイン）』」

何をこしゃくな、そう言いたげに笑い返した相手が一瞬ふっと細い眉を寄せた。何か考え込む表情になったが、すぐに顎をしゃくってイルファを連れていくように命じる。

「ほら来い！」

男は再び元来た階段の方へイルファを突いた。今度は一人でイルファを追い立ててくる。

こづかれ追われながらどんどん階段を下りていく。一階でも止まらず、なお降りた薄暗い廊下の奥へ追いやられる。

「ようし、ここに入ってる！」

そこは小さな牢だった。イルファが入ると、低い天井も迫る壁もより一層縮んだように見える。かび臭い匂いのべっとりとした湿気が体を包んでくる。ひよっとすると子ども用じゃないかと思える小さな石のベッドが一つ、壁の隅に穴が掘られて、そこから異臭が漂ってくる。

「似合ってるぜ」

連れてきた男は歯を剥き出してからかい、重そうな木の扉を閉めて去ろうとする。

だが、彼がイルファに背中を向けた瞬間、イルファは相手の首に腕を巻き付けた。掌で声を封じ一気に絞め落とす。

男は呻く間もなくずるずる崩れて足下に転がった。『運命（リメイン）』支配下（ロダ）ではなかったのだろう、気を失った姿はでろりと転がっているが溶けはしない。

「お前には門番よりもこっちが似合ってるぜ」

男を牢に引きずり込み、服を脱がせて体を縛り上げ、口も塞いで床に転がした。周囲を見回し、溜め息をつく。

「まあ、まず計画通りって奴だ」

男の服を隅の穴に放り込み、冷えた床に男の体を枕に寝転がる。

「むむんっ...」

男が苦しそうに唸ったが、イルファの知ったことではない。後は夜が来るまでイルファの出番はない。

（こんな時は休むに限る）

一つ大きなあくびをすると、イルファは間もなく眠り始めた。

「夜は好きです」

テオ二世はすっかり暮れた外界を、澄んだ淡いグレイの目で見つめながら続けた。

「闇はある意味では優しいものですからね。見たくなければ、何も見せない」

ユーノの部屋で窓辺に寄りかかる少年王の顔には大人びた憂いが漂っていた。

『紅（あか）の塔』襲撃にかかるまでの僅かな待ち時間を、彼はユーノと過ごすことに決めたらしい。部屋には窓際にほの暗い明かりが一つあるだけ、アシャは他の兵達と詳しい打ち合わせの真っ最中で、部屋にはユーノしかいない。

ユーノはベッドに腰掛け、見るともなく、テオのプラチナブロンドが窓から入ってくる風に幻のように舞うのを見ていた。

「ミルバは.....ぼくの前へ初めて現れた時、キャサラン中央区の諸公の姫という触れ込みでした。物腰は上品、紅の瞳も宝石のように美しい.....ぼくはそれと気づかない間に恋に落ちていたんです」

テオは外の景色を見つめたまま、風に揺れる髪を軽く押さえた。

「ミルバもぼくを愛してくれ、ぼくらは婚約の儀を執り行い、彼女はぼくの城に住むことになりました。今思えば、その時こそ、全ての宿命の交差点だったのかも知れない」

テオの声は遠く虚ろだ。もう決して帰ってこない、だからこそ一層鮮やかな思い出の日々を噛みしめている。

（宿命の交差点.....）

ユーノもまた、そのことばを噛みしめる。

もし、そのようなものがあるとしたら、彼女とアシャが出会ったあの瞬間をそう呼ぶのかも知れない。道に倒れていたアシャをカザドの刺客かと疑って近寄った時、瞬きを繰り返して開いた眩い紫の

瞳に捉えられたあの瞬間、宿命とやらは既に二人の行く末を未来の風に描いていたのかも知れない。

(決して結ばれることはないと.....わかっている想いを.....行き先のない祈りの先を.....)

風は次第に冷えてくる。

テオの声がその温度を感じたように震えている。

「ミルバはすぐに城に溶け込みました。父も母も彼女を気に入り、そしてある日、突然全てが変わってしまっただけです」

テオは少し目を閉じた。

やがて、齒の間から無理矢理ことばを押し出すように、

「辺境区の狩りに数人の共を連れて出た時のことでした。その日も変わりなく、お気をつけて、と見送られて.....ぼくは何も気づかなかった。けれど、その間に、彼女は自分に従わない者は殺し、残った城の者全てを引き連れて『紅（あか）の塔』に移りました。そして、戸惑うぼくに宣告したんです。命を捧げて彼女に従えと。『白の塔』を放棄し、王子の地位を捨て、彼女に跪く奴隷の一人になるか、あるいは死ぬか、どちらかを選べと。.....前者をとるには、ぼくはあまりにも.....王子としての教育を受け過ぎていました」

テオの声は、寒さだけではなく、押さえかねた激情にも震えているように聞こえた。

「命を狙われ、たびたび殺されそうになり、家来は次々と減り.....その都度、それらはミルバのせいなのだと言いつつ聞かせました。でも.....」

テオは髪から手を離して、部屋の中のユーノを振り返った。風が銀の髪を再び弄ぶ。それは激動の中に巻き込まれているテオの運命を表しているようにさえ見える。

「だめでした」

ぼつりと囁いて、淡く苦笑した。

「おかしなことに、これほど手酷く裏切られておきながら、ミルバは、ぼくにとって、今もなお『誰よりも愛しい人（イ・ク・ラトール）』なのです」

「イ・ク・ラトール...」

ユーノは聞き慣れないそのことばを繰り返した。

「この世に存在する全てのものより愛しい人...というような意味です。自分の命も心も犠牲にしても得たい人...ぼくにとって唯一無二の人、イワイツタのように強く確かな、生きている手応えを与えてくれる女性.....なのに、ぼくはその人と共には生きられない」

テオの切なげな声は、ユーノにとっても親しい想いのものだった。

鮮やかで強くて愛しい一人の姿。

けれども、その姿には、目に見えない封印がされている。

ユーノがユーノである限り、彼女はアシャに近づけない。そこには白い手が置かれているから。レアナという名の、真っ白な美しい手が。

だから願う。

「誰よりも.....護りたい...と」

「そうです」

テオが目を細めた。

「あなたは女性なのに、よくわかりますね」

「っ」

ユーノはぎくりと体を強張らせた。窓辺のテオを凝視する。

「恋をしている者は敏感なものです」

テオは曖昧に笑ってみせた。

「どうして、あなたが性別を偽っておられるのかはわからないけど、口外はしませんよ」

「...ありがとう」

思わず小さく吐息をついた。

性別を偽るのは旅の安全のため、けれど、もう一つの意図があるのを自分でも気づいている。
(男だと思っていれば、男のように振舞っていれば、アシャは余計な気遣いをせずにする)
そして、おそらく自分自身も、自分が男として振舞い続ければ、アシャとの距離も縮まらずに済む
.....これ以上アシャに魅かれてしまうことを食い止めることができる、かもしれない。
(無理そう、だけど)
小さく続いた本音をユーノは目を閉じて聞かないふりをする。
「あなたの恋は、女性なのに男性のものようですね」
テオの声に意識を戻した。
「愛しい人を『護りたい』と思われる」
「おかしい？」
覗き込まれて本心を見抜かれそうで、思わず相手から目を逸らせた。
「いえ、でも」
テオは微かに首を傾げた。
「女性は護られるものでしょうか？ 護られ愛され慈しまれるものではありませんか？」
無邪気なテオのことばが胸に食い入った。
(それら全てを諦めなければならぬ者もいるんだ)
叫びそうになったのは、きっとテオが優しいからだ。
(ほんとうは、わたし、だって)
零れかけたことばを危うく呑み込み、すり替える。
「そう、なんだろうね」
静かに答えて目を上げ、テオに笑ってみせた。
(慣れた痛み、慣れた芝居)
何が真実かわからなくなるほどに。
テオは瞬きをした。ふいに、ユーノの声の弱々しさに気づいた、そんな顔で口を噤む。と、ふと、
何かを思いついたような顔になって、そっと微笑んだ。
「...こんなときに、お頼みするのは心苦しいのですが」
「え？」
一瞬、テオのグレイの瞳の中に、今まで浮かばなかった激しいものが過ったように見えた。
窓辺を離れて近寄ってくる。
「ぼくの城のしきたりでは、己の生死をかけての戦に出かける時には、乙女の祝福を受けていくこと
になっているんです。そうすれば、必ず生きて帰って来れるという言い伝えなんです」
テオの瞳がふわりと和らぎユーノを包む。怯えさせないようにと気遣うような足取りで、ユーノ
の前までやってきて、
「あなたの祝福を頂けないでしょうか」
「祝福？」
ユーノは体を固くして立ち上がった。
「え、でも、あの、私、祝福の授けかたなんて、知らない、んだけど」
口ごもりながら、必死にセレドでのあれこれを思い出す。戦う前の祝福？ どこかの諸侯がそんな
ことをねだっていたらどうか？ 思い出すのはレアナやセアラの姿ばかりなのが、一層情けない。
緊張したユーノに、テオが笑みを深める。
「御手を頂けますか」
滑らかな動作で膝を折り、ユーノの前で体を落として跪き、促すようにユーノを見上げてきた。
「は、はい」
慌てて左手を差し出すユーノにくすりと笑って、ユーノの手を取り、押し頂いた。そのまま、手
を引く間もなく彼女の手の甲に軽く唇を押しつける。
「！」
温かな柔らかな感触が手の甲を軽くついただいで、ユーノは震えた。とっさに引きかけた手を、相
手が強く握りしめる。
動きを止めたユーノを、テオがしっかりと見上げた。
「あなたの祝福にかけて、必ず生きて戻ってきます」
その目の光の強さに、ユーノははっとして唇を引き締めた。
テオが生きて戻ると言うことは、誰よりも愛しいと想ったミルバや父母を殺すことでもある。そ
の決意の全てを、ユーノの左手が今、受け止めている。

(怯んでる場合じゃない)

幻であれ何であれ、今求められているのはユーノ自身、その存在があたえる帰還への祈りなのだ。

(揺らいじゃいけない)

命を未来に繋ぐ力を少しでも与えられるなら。

「わかりました。ご無事で」

背筋を伸ばして相手を見返しつつ答えたユーノを、テオはまた一瞬どこか激しいものを満たした瞳で見つめた。

それからわずかに頷いて立ち上がり、ユーノの手を振り払うように、静かに部屋を出て行った。

深い憂いを込めた溜め息が、『紅(あか)の塔』を目前にした荒野の闇に吐き出され、ゆっくりと沈んでいった。

生温い風がアシャの髪を肩から掬い上げるように空へと舞わせる。前髪を上げるように留めている飾り紐から、後れ毛が幾筋かの金糸となって額や頬にまとわりつき、顔を撫でていく。

(俺が、『運命(リメイン)』討伐に加わる)

アシャは複雑な思いで目を細めた。

前方にそびえる『紅(あか)の塔』はまだ動かない。

その、暗闇でも重苦しく見える赤黒い塔を、険しい目で凝視する。

(『視察官(オペ)』が中間者たる位置を捨てて動くときが来るとはな)

もともと、『視察官(オペ)』は『運命(リメイン)』と当たらず触らずの関係を保っている。両者は言わば、ラズーンという天秤の両側の皿、どちらが欠けるのも世界の均衡を崩すもとなる。

だが、今や世界は、命全てを支配下におさめようとするかのような『運命(リメイン)』の荒々しい手に掴み取られ、人々は恐怖に怯えていた。対してラズーンは、二百年祭のただ中であって不安定に揺さぶられている。通り過ぎてきた諸国諸村を見ても、迫る脅威に自衛策を立てている所はほとんどない。国の党首さえ及び腰で傍観する姿勢さえあるのは、二百年の平和が長過ぎたということなのだろうか。

世界の、崩れつつある均衡を保つためには、『視察官(オペ)』が『運命(リメイン)』を狩るのも仕方がないのかも知れない。その真の意味を、この世界のどれだけの者が理解しているのか。

ラズーンの中でさえ、今広がりつつ異常な状況をどこまで把握できているのか。

(『太皇(スーグ)』を除いて)

だが、『太皇(スーグ)』こそは、ラズーンの頂点にありながら、決して世界に干渉しないという重責を担う存在、世界の混乱に手を下すわけにはいかないことを、アシャはよく知っている。

「……」

脳裏に蘇る白い双宮の静まり返った光景、人気のないその施設の存在を知った者は、すぐにその記憶を、あるいは時にその存在そのものを失うことにもなる。

(ラズーン二百年祭)

それは、ラズーンという『泉』が生命力を維持できなくなる限界の時だ。

その『泉』は、二百年に一度、豊かな命の力を失う定めにある。守るべき未来への試みを止めなくてはならなくなる。

そして、そこから『運命(リメイン)』は数を増して産み出され、命の形は混乱し、太古生物が復活する。人々の心は不安に激み、ラズーンへの信頼も揺らいでいく。

そのとき、中間者たる『視察官(オペ)』は、その闇の力との均衡を守るために、諸国から『銀の王族』を『泉』の呼び水として集める。『運命(リメイン)』の暗躍については『泉の狩人(オーミノ)』が押さえに回る。

それが長い年月に定められた互いの役割のはずだった。

ところが、今回の二百年祭は、アシャが知っているどの二百年祭とも違っていった。

ラズーンの命の力はこれまでにないほど枯渇している。

それを建て直すはずの『銀の王族』を集める『視察官（オペ）』は、『運命（リマイン）』の攻撃を必死にかわしながらラズーンを目指し、既に途中で力尽きた者さえあるようだ。

太古生物の復活は種類も数も格段に多く、復活する速さも桁違いだ。

加えて、諸国の動乱は、まるで『運命（リマイン）』の支配を待ち望んでいるかのようにあちこちで沸き起こり、『運命（リマイン）』と手を携えてラズーンの基盤を揺るがしにかかっているようにさえ思える。

（その激しい嵐の中で、護られることなく一人で戦い続ける、『銀の王族』の娘）

体に秘めている命の力ゆえに、世の幸福と安全を保障されており、それゆえにたおやかで優しい『銀の王族』の中であって、ただ一人、時代の黒雲に気づき、怯むことなく昂然と頭を上げて歩く少女。

ユーノ・セレディス。

その存在は、『銀の王族』の中でも変化しつつある何かの動きを示すように、鮮やかな光と衝撃を周囲にまき散らしながら、ゆっくりと時代の波から浮かび上がってきつつある。

（あの『月獣（ハーン）』のように）

自らの存在をもって、相対する全てに問いかける、

（お前の命は真実か、と）

そして今、その娘を挟んで二人、アシャとギヌアは互いの命の『正しさ』をかけて真っ向から対峙している。

（俺に、そこに立つ資格などない、そんなことはあいつもわかっているはずなのに）

命の正しさというならば。

（俺は、違う）

この世界を引き継ぐべきでは、ない、存在。

（『運命（リマイン）』と同じく）

彼らが闇の命だというなら、アシャもまた。

（なのに）

なぜ、あなたは俺を正当後継者に選んだのだろうか？

（『太皇（スーグ）』）

同じ問いを向けた時に返ってきた微笑みは、どこまでも静かで穏やかだった。

（なぜだ）

アシャの存在が何なのか、誰よりも知っているはずの護り手なのに。

（それとも……俺がギヌアに屠られるのを望んだのか…？）

「アシャ」

胸の内に湧いた甘やかで切ない痛みは、背後から呼びかけてくる囁き声に消された。

無言で振り返ったアシャは、同じように物陰に身を潜め、地を這うように近づいてくるテオ二世の姿を認めた。

チュニック一枚とマントという軽装、それと知っていなければ、王子には見えないに違いない。だが、肩に留めていた飾り石にも砂をかぶせて輝きを消しているところは、甘そうに見えてなかなかどうして、油断のならない遣い手なのかもしれない。

「彼からの合図は？」

緊張した声で尋ねてくるが、苛立ってはいない。その落ち着きぶりに満足した。

「まだだ。だが…」

ふっとアシャは目を細めて嗤った。瞳の中に魔的なものでも漏らしてしまったのか、テオが奇妙なぎょっとした表情になるのに笑みを消す。

「見張りは入れ替わって八人、たいした数ではない」

我ながらひんやりとした声で応じると、テオが眉をしかめて緩やかに首を振った。

「総勢おそらく八十名はいるでしょう。ぼくには楽な戦いだとは思えない」

「烏合の衆だ」

アシャは淡々と応じた。

「訓練されていてすぐに反応するのは、実質四十人もいるかな。後はミルバの操り人形だろう」

「そのとおりです」

テオは目を伏せた。

「ミルバはぼくにまかせてください。王としての……務めがあります」

少年の顔には苦悩がある。

「……よかろう」

アシャは頷いて、再び『紅（あか）の塔』へ目をやった。

風は甘く香っている。平地の花の匂いを、恋人達のために吹き寄せてやる粹な風だ。それは、重く立ち竦んだような『紅（あか）の塔』を取り巻き吹き過ぎ、中の人間達に囁くのだろう、人の心を取り戻せ、と。

ミルバ、と微かにテオがつぶやいた。

彼もアシャと同じ事を思ったらしい。

「ん」

ちらつ、と『紅（あか）の塔』の基底部で何かが閃いた。

遠くの高空を舞っていた白い鳥がぐるりと旋回して、大きな軌道でアシャの元へ戻ってくる。こんな夜間に飛ぶ鳥はいない。特殊な視力を持つ太古生物クフィラ、サマルカンドの合図だ。

テオ二世の片手が差し上げられ、前へ、と振られた。

夜の澁みをかきまぜていくように、先頭を切ってアシャは動く。走り出しながらさりげなく腰のあたりに触れた手に、魔法のように剣が抜き放たれている。例の金の短剣ではない、人間用の長剣だ。周囲を同時に影が追従する。だが、散開しながら『紅（あか）の塔』へ忍び寄る影は全部で十もない。

周囲に男達が従ってくるのを確認して、アシャは速度を上げた。傍目には一瞬間に溶け入ったように見えるだろう速さ、そのまま一気に塔の基底部入り口に辿りつく。

「よう、アシャ！」

突然、静寂を破り、アシャ達の隠密行動を無にしかねない無遠慮な声が響いた。ぬっと姿を現したイルファが、陽気に笑いながら手を振っている。さすがに、うるさい、と目で制したアシャににやにやしながら、

「こいつで見張りは最後だぜ」

手に掴んでいた男の頭を、どすつ、と近くの壁に叩きつけた。ぶしゃ、と妙な声をたてた相手はずると壁を伝って崩れていく。その男の回りにもごろごろと、体格のいい男達が丸太のように転がっていた。

「待ち切れなくて、少々遊んでた」

イルファはふてぶてしく笑った。

「意外に普通だったぞ？」

「俺達の獲物はなしか？」

「あるぜ」

イルファは塔の上へ顎をしゃくった。

「超一級の奴が、塔の王の階に」

これだけ騒ぎを起こしても、配下一人よこしやがらねえ。よほど自信があると見える。

「自分が負けるはずはない、ってな」

ちらりと視線を投げてきたイルファに、テオが弾けるように飛び出し、塔の中へ駆け込んでいく。

「テオ二世！」

アシャの声に振り返ることもないその背中からは、一つの名前を声にならない声で叫びながら、見る見る階段を駆け上がっていく。

「煽ってどうする！」

舌打ちしながらイルファを嗜め、アシャは手にしていた長剣をイルファに譲った。

「外から入れさせるなよ！」

「おうよ！」

イルファに頷いて階段に飛び込み、上がりかけて振り返る。

「…すぐに狩人が来るぞ」

「狩人？」

「来たら邪魔をするなよ？ 殺られるぞ」

「……味方じゃねえのか」

「『今回』は、味方についてくれる約束だがな」

言い捨てて階段を駆け上がる。

「おいおい物騒だな。……まあ、ここにいた奴あ、災難だってことだな！」

(その『ここにいた奴』に自分が入りかねないことは気づいてないな)

「頼むぞ」

ひんやりと笑いながら、アシャは先を急ぐ。その視界の隅で、急を察して群がり寄ってくるだろう『運命（リマイン）』とその配下を迎え撃つ、イルファとテオの部下達が、互いを守るように身を寄せ合うのが見えた。

階段の途中で、テオはすぐに敵と出くわしたようだった。魂が消えるような悲鳴を上げて男が一人、階段を転げ落ちてくる。

とっさに身を躲しながら、アシャは上って来る仲間に叫ぶ。

「スート！ ネル！」

後ろから必死に追いかけてきていた二人が、慌てて身を避ける。片腕を落ちてきた男に掴まれて、危うく一緒に転がり落ちようとするネルを、スートがぎりぎりで引き止め、男を蹴り落とす。

男がそのまま近くの壁に強く激しく叩きつけられたかと思うと、ばじゃっ、と奇妙な音をたてた。

「ひっ...」

「、ぐっ」

呻いて凍りつく二人の前で、男の姿は一瞬にしてどろりと姿を失い、肉汁のようにべったりと壁から階段に広がる腐臭漂う異物と化した。

「覚えておけ」

体を震わせる二人の兵士に、冷えた声でアシャは呟いた。

「『運命（リマイン）』に与した者の末路はああなる」

二人はがくがくと歯の根が合わぬ顔で必死に頷いた。再び階段を駆け上り始めるアシャの後に続いたスートの目には涙が浮かんでいる。ネルの足下はよろめいている。無理もない、そう思ったアシャの視線が流れたのを好機ととらえたのか、前方から飛びかかってきた兵士の剣先がアシャを遮る、が、甘かった。

アシャの視界には全ての動きが入っている。突き出された剣を軽々と短剣で跳ね上げる。我が手から飛び離れていく長剣に気を取られ、無防備に見上げた相手の腹に、アシャの蹴りが深く食い込む。何か巨大なものに弾き飛ばされたように壁に飛んだ体が、やはりぐじやりと腐臭を放ちながら溶け落ちた。

「、、っ」

「『運命（リマイン）』の支配下にあったものの失敗は死だ」

「わか...た」

スートが吐き戻しながら呻いた。側に居たはずのネルは別の相手に襲われたらしく、下から響く剣戟の音、近づいては遠ざかり、なかなか上がってこない。

「油断するな！」

「あ、あっ」

ネルを振り返る暇もなく、次々と降るように現れる敵、剣が擦れ合い火花を散らし、意志を削り命を削る。

「テオ！」

アシャが彼を見つけたのは、それらの攻撃を凌ぎつつ、何とか二階に辿り着いた時だった。大男に床に組み敷かれ、喉元にじりじりと剣を突きつけられている。

アシャの手が素早く動く。金の光条が走り、男の背中を貫いた。

「ぐおっ！」

呻いて仰け反った男の傷口から、ぶすぶすと黒い煙が立ち上る。

「ぐ、ぐ、ふっ.....」

背中中央に突き立った剣を引き抜こうとでもするように、しばらく虚しい身もがきが続いていた男は、やがて四肢を痙攣させ、ぐらりと揺れてテオの横に崩れ落ちた。見る間に、剣を中心として黒い染みのようなものが広がり、肉の焼け爛れる異臭が鼻をつく。

絞められて赤くなった喉を押さえ、咳き込みながら起き上がったテオの髪は乱れ、頬にも長い一筋の切り傷が走っている。血と土で汚れた顔が、隣に転がった男の状態に凍りついていた。

「アシャ...これは...」

声が揺らめいて心細げい響きを宿した。不安げにアシャと男を交互に見る、その恐怖の視線もアシャには慣れたもの、

「話は後だ！」

厳しい声で相手の問いを遮る。

「すぐに下から手が増えるぞ！」

「はい！」

怯む自分の体に舌打ちするような顔で跳ね起き、奥の階段に走り寄ったテオは、アシャのことばに動きを止めた。

「ミルバは居たのか？」

ゆっくりと振り返る顔は白い。

「この上の階にいます。ぼくを待っているはずですよ」

伏せた目はアシャを見ない。

「殺る気か？」

アシャは尋ねた。

本当は、殺せるのか、とそう尋ねたかった。

テオは静かに目を上げ、にっと笑った。どこか寂しそうな、けれども、もう迷いのない笑み、グレイの目に今度ははっきりと王子の誇りを秘めた色を浮かべて答える。

「ぼくはユーノの祝福を受けた」

「.....」

一瞬自分の表情が消えたのをアシャは意識した。

(祝福?)

脳裏によぎる幾つもの慣習、キャサラン辺境ではどうだったか。

「そのためにも、生きて帰らなくてはなりません」

テオの声にはこれまで感じられなかったしなやかで強い意志がある。

すぐに思い出せないキャサランの祝福、だがそれが相手の何かを変えたと感じた。

恋人に裏切られ、自分の判断に自信を失って疎んでいた一人の男を。

(ユーノがこいつに力を...誇りを与えたのか)

軽く唇を噛む。こんな時と思う気持ちを裏切って、胸の奥でちり、と小さな炎が身をよじる。

だが、その感覚も一瞬だった。

背後から次第に戦闘の気配が迫ってくる。スートとネルはかなり手こずっているようだ。

「では、それを持って行け」

アシャは黒焦げになった大男の死体の背中にまだ突き立っている短剣を指差した。

「それなら、ミルバにも『効く』」

『効く』のことばに、テオは改めて自分の敵を思ったのだろう。側に倒れている男の焦げた死体に視線を泳がせた。すぐに振り切るように唇を引き締める。

「.....わかりました、アシャ」

厳しい顔になって、短剣を男の背中から引き抜いた。もうっと白い不快な臭気を立ちのぼらせるそれを、テオは片手にきつく握りしめる。

「お待たせ、しました！」

「すみません！」

「行くぞ」

「はい！」

スートとネルが転がるように駆け上がってくるのを合図に、アシャとテオは紅の階段をさらに駆け上った。

途中何度か襲われたが、それに手こずるアシャではない。道を切り開き、護衛の最後の一人を倒し、ついに巨大な金属の扉の前に立った。

「ここに...っ」

はあはあと息を喘がせながら、テオが扉を睨みつける。

「二世！」

「お早くっ！」

背後から迫ってくる足音を聞きつけたのだろう、スートとネルが悲壮な叫びで迫る。アシャはテオと階段、等分に注意を配りながら、横目でテオの動静を伺う。

「ミルバ...っ」

テオが右手に短剣を握りしめたまま、微かに体を震わせながら、扉をゆっくり押し開ける。

広々とした部屋は静かだった。正面に小さな玉座があり、そこを薄布が天幕のように囲んでいる。

繰り返して来た『運命(リマイン)』の設営、ことさら聖なるものとして区別するような配置は自らの劣等感を満たすためか。

今、その一番高い玉座に座っているのは、どう見てもテオと同じぐらいの少女だった。天井から吊られている薄布に似た白いドレスを身にまとい、細身の体を玉座に包み込ませて深く腰掛けている。

そして、少女の両側をまるで守るかのように、兵士とは別の、一目見て君主とその奥方とわかる豪華な衣装をつけた二人の男女が虚ろな顔で立っていた。

「父君……母君……」

テオの体が硬直した。

わかってはいたこと、けれど、これほどはつきりと両親が敵なのだと気づかなかった、そういう顔だ。

「待っていたのよ、テオ」

玉座に座っていた少女は、豊かな黒髪を、細くて白い指先で丁寧に後ろに払った。にこりとあどけなく可愛らしく笑ってみせる。甲高い声は、まだほんの少女であることを強調するようだ。

だが、その真紅の瞳は、百戦錬磨の剣士のように、正視できないほどの激しい殺意にぎらぎらと猛々しく輝いている。

「これ以上、ばかなことをしないで、テオ」

ミルバは声を低めた。哀しげに眉を寄せてみせる。

「私達の仲間の死に様を見たでしょう？」

甘く柔らかな囁き声だった。

「惨いこと」

指先で不安がるように、そっと白いドレスの胸元を押さえてみせた。

「怖いわ」

苦しそうにテオの顔が歪む。

「それに……お父様やお母様を、あんな酷い目にあわせたくはないでしょう、テオ？ あなたはいつもとてもいい息子だったわよね？」

テオは玉座の側の両親をそれぞれに見やった。ミルバの声に、当然のように深く頷き微笑む相手に、テオの眉が険しく寄っていく。

「辺境の…王者が…」

悲痛なつぶやきが唇から零れた。

「辺境区に、その人ありと讃えられた、名君が」

掠れた声はかつての日々を懐かしむ。

「その名君を支える賢妃、あなたの知恵に、幾度この地は難を逃れたこと、だろう」

「テオ」

「嬉しいわ、テオ」

息子に讃えられて微笑みを深める王と女王、その笑みにテオが打ちのめされる。

「あなたさえわかってくれたら、私達は幸せになるわ」

「ミルバ…」

「……その剣を渡してちょうだい、『誰よりも愛しい人（イ・ク・ラトール）』」

「ぼくは…」

階下で起こったどよめきが、テオの掠れた声を消していった。

街がいきなり目を覚ましたようだった。

のろのろと家屋から這い出して来る亡者のような顔つきの、様々な年齢の無数の人間が、イルファ達にゆっくりと迫りつつあった。

「おい……こいつあ…」

イルファは一渡り周囲を見回して目を細めた。べろり、といささか獰猛な仕草で唇を舐める。

「ちょっとすげえな」

「すげえ、ではすまん…」

すぐ側に居たテオの配下の一人、ゲルトが震え声でつぶやいた。

「こんなの勝てるわけではない。やはり無茶な策だったのだ。王子は客人にたぶらかされたに違いない」

「アシャの悪口は聞きたかねえな」

イルファはじろりとゲルトをねめつけ、さりげなく剣の向きを変えて見せた。

「アシャは言ってたんだ、押さえはいらねえ、とっておきの『狩人』が来るからってな」

「で、でも、その『狩人』はどこに来てるんだ」

同じくテオ配下、キートが引き攣った緊張した声で囁いた。

じわじわと包囲を縮めてくる人の輪の中から、誰か一人でも飛びかかってくれば最後、それを皮切りに、わっと総勢が襲いかかってくるのは目に見える。

「見渡す限り敵だぞ」

キートの声が泣きそうになっている。

「今はな」

イルファはあしらった。

「どこにも味方はいないじゃないか」

「まだな」

「いつ味方が現れる？」

「そのうちな」

「どこにだ？」

「ええい、うるせえっ！」

イルファは切れた。

「他力本願しかできねえ奴が、ごたごた抜かすんじゃねえ！ そのうち、てめえの目ン中にまで味方って奴を突っ込んでやるから、ちったあ黙れっ！」

「仲間割れをしてる時じゃない」

黙っていたケジェが体を固めた。

「来るぞ！」

ケジェの声が消えるか消えないかで、人垣は瞬時に崩れた。狭い湾に押し寄せてくる大きな波のように、イルファ達めがけて押し寄せて来る。

「でえいっ！」

イルファの剣がうなりを上げて、空を切った。数人が旋風に巻き込まれて吹き飛んでいく。だが、それも数回功を奏しただけ、圧倒的な数の不利はイルファだけでは手に余る。

「あっ！」

ケジェが片腕を押しえてよろめいた。キートが悲鳴まじりに叫び声を上げながら剣を振り回している。

「うわあああつ、なんだっ、なんだっ、これっ！」

剣が当たって致命傷を負った敵が、次々とずるずるとした液体状のわけのわからぬ代物となって崩れ落ちるのに、誰もが次第に恐慌を来たし始めていた。

「人間じゃないのか？ 人間じゃないのか！ 人間じゃないのかあっ？！」

叫びながら、その声でますます怯え追い詰められて、キートは両目を開き切ったままだ。ゲルトが傷を負って、基底部の入り口に転がり込んだ。必死に無言で入り口を護り耐え抜いていたトラブが、やはり無言でがくりと膝をつく。

「んなろくそおっ！」

さすがのイルファにも焦りがでてきた。いくらイルファが『丈夫』でも、五体バラバラに切り刻まれては『復活』できない。

「仕方ねえっ！」

イルファは喚いた、

「こうなったら、俺は愛に死んでやるっ！」

キートがイルファのことばに、さらに我を失った顔で暴れ出す。

もう構わない、どこからでも何でもこい。

そう身構えたイルファだが、そのとたん、ふいと、雪崩落ちるように襲いかかってくる人波の彼方に、何か妙にゆったりと揺れ動く白いものがあるのに気がついた。

「あん？ 何だ、ありや」

飛びかかってきた一人を殴りつけて放り出しながら、イルファはもっとよく見ようと首を伸ばした。そのイルファに誘われて、ケジェが片手を庇いながら同じ方向に目をやり.....つぶやいた。

「何だ.....あれは？」

それは、白い馬だった。

王侯貴族の持つ、よく手入れされた毛並みと見事な体格を持つ、美しい馬だった。

だが、その顔には中央に大きな目がたった一つしかない。

まるで宝玉のような眩いほどの金色の瞳。

豊かなたてがみを乱し、風に白い炎のように尾を舞わせながら、人波を石くれのように蹴散らして、みるみるこちらへ駆け寄ってくる。

その馬上に乗っているのは、どう見ても、薄水色のドレスを着た女性だった。泡を吹きながら猛々しく走り寄ってくる馬を軽々と制しながら、この世のものとは思えぬどこか淡い幻のように、けれども確かに敵を冷酷に散らしながら、彼女はどんどん近づいてくる。

「ぐくうあっ！」

「ぎゃっ！」

「ひいっ！」

怒号と悲鳴が女性の進行に従って辺りを圧倒し始めた。

イルファ達を襲っていた敵も、一体何事が起きたのかと背後を慌ただしく振り返る。

響き出した音には、聞くに堪えない、何かを踏みつけ踏みにじりへし折る音も混じっていた。絶叫と胸が悪くなる粘液質の、あるいは液体状のものが次々とぶちまかれていくような音。

それらを全く気に止めた様子もなく、馬を進め続ける女性の長い髪を、風がふわりと吹き払った。星明かりがその顔をそっとためらうように照らし出す。

「ぐ」

「むう」

イルファ達の喉から妙なうめきが上がった。

無理もなかった。

艶やかな髪に取り巻かれた女性の顔には、あるべき肉がなかった。卵形の美しい輪郭の中にあっただのは骸骨以外の何ものでもなかったのだ。ぽっかり開いた眼窩からは今にもウジ虫が零れそうだし、白々とした骨の肌には剥き出された牙のように並ぶ歯が、星明かりにぞっとするような光を放っている。柔らかさなど微塵もない顔の造作には、残酷な冷笑しか感じられない。目と鼻があるべき位置に開いた穴に潜んだ闇からは、確かに死の臭いがした。そして、その姿が人間を踏みにじり、引き潰すように暗黒の彼方から一つ目の馬に乗って駆けて来る姿は、それでも胸を喰い尽くすような圧倒的な美があった。

『目を閉じなさい』

突然、辺りに威圧的な声が響いた。中空にいきなり弾けた火花のように、耳を貫き脳髄を痛めつけるような荒々しい力を思わせる声だ。

『私の今宵の相手はそなた達ではない。もっとも、目を焦がされ、その身を私に差し出そうというなら、あえて拒みはせぬが？』

死の国から吹く風も、これほどのおぞましさと陰惨さを含まないだろうというような声音だった。

「う、うあ」

慌ててキートが目を閉じる。イルファも急いで目を閉じた。

理屈ではない、剣士としての直感が、対抗出来る敵ではないと教えたのだ。

それでも、視界が閉ざす寸前、イルファはその女性の手からつぎつぎと金の光球が放たれ、敵を呑み込み、打ち倒し、消し去るのを見た。そして、女性と面と向き合った者達が絶叫して目を押さえたかと思うや否や、ある者は溶け、ある者はいきなり炎を上げて燃え上がり、崩れ落ちていく様も。

「く、くそ」

情けないとは思ったが、身体の表面をみるみる冷たい汗が覆って、イルファは震えた。

すぐ側を馬がゆっくり通り過ぎて行くのがわかる。

彼女がアシャの話していた『狩人』で、味方なのだともわかっている、それでも、体の震えが止まらない。

『ほほ、ほほほ』

暗い、魔的な笑い声が響き渡った。

『そなた達は素直で可愛い。あのひねくれたアシャとは違ってな……ほほほ』

体を振り絞るような、喉を引き裂くような悲鳴が続く。腹をねじ切りせり上げてくるような、凄まじい腐臭が鼻を襲う。絶叫と、重いものが中空から降り落ちるような音、何を踏むのか嵐の野を駆けるような濡れた馬の蹄の音、そして、女性はますます楽しげに、高く高く笑いながら、歌っているようにことばを繋ぐ。

「我が名はミネルバ。暗き闇の娘と人は呼ぶ。我が勤めは「運命（リメイン）」狩り、その命を啜り楽しむことこそ、我が定め。ほほ、ほほ、うれしやなあ、命がさても儂う散るは、この手の闇か、そなたの闇か。ええ、さあ、誰ぞ答えよ、答えてみよ』

闇に響くその声は、呪歌とも聞こえ、なお巨大な魔を呼ぶ詠唱とも聞こえる。

「とんでもねえのを...よこしやがって」

『人の子よ』

「うわっ、はいはいっ」

つぶやいたイルファにミネルバが唐突に話しかけてきて、イルファはひやりとした。

『もう目を開けても構わぬぞ。そなたの周囲に敵はおらぬわ。それに』

再び心を凍てつかせるような笑い声が響いた。

『そうさな、天下一の見せ物、二度とは見られぬ一幕を見せようぞ』

声は笑みを含んでいる。

イルファはごくりと唾を呑み込んだ。自慢じゃないが、もし万が一相手の気が変わっていて、イルファもついでに屠ろうと考えていたらと思うと、すぐには目が開けられない。

「ええい、くそっ」

必死に自分を叱咤して、イルファはそろそろと目を開けた。

すぐに、自分の目が限界まで見開くのを感じる。

そこには、今まで見たことのない悪夢が広がっていた。

のたうっている者も呻いている者もはやいない。

大地はどろどろと形を失った肉塊とも血液ともいえぬものに覆われて、土が見えない。腐臭の酷さに感覚は麻痺していて、この汚泥と化した死体の海を土が呑み込むのにどれぐらいの時間がかかるのだろうと、イルファはぼんやりしてしまった。

「ひいいっ！」

遠くの方で悲鳴が響いた。

はっとして目をやったイルファは、星明かりの中で、白馬がまだ数人を追い回して、死の乱舞を続けさせているのを見た。白馬の背中には丸太のようなものが積まれている。それが硬直した死体だと気づくのに、時間はかからなかった。

『久しぶりよの、「運命（リメイン）」狩りは』

楽しげな、凄惨な声が、またどこからともなく聞こえてきた。

白馬の前で追われていた者が一人、何かに脚を取られたように倒れる。その背骨を踏み砕いて笑い、なおもミネルバは他の者を追う。

じっと見ていたイルファは、じつとりとにじんだ額の汗を拭いながら、それらがすべて『運命（リメイン）』であるのに気づいた。そうでない雑魚は、早々に片付けられてしまったらしい。

また、今一人の『運命（リメイン）』が脚を纏れさせて転び、その手足をミネルバの操る白馬が容赦なく踏み潰した。絶叫を上げて跳ね上がった後ぐったりした体が、透明な糸で引き上げられるようにふわりと浮いて、ミネルバの後ろ、白馬の背に狩りの獲物として積まれていく。

次の標的となった『運命（リメイン）』は二人、それぞれ別方向に向かって駆け出し、何度かミネルバの追撃を免れたかに見えたが、ミネルバはまたも、あの重苦しく粘り着くような笑い声を響かせて軽々と白馬を操った。カツ、と鋭い音をたてて、白馬のどす黒く血に塗れた脚が地面を蹴る。見る間に一人を蹴り砕いて生け贄とする。もう一人が逃げ惑うのを楽しむように放っておいたが、逃げ切れるかと思えた瞬間に白馬の歩みを翻して、『運命（リメイン）』の望みを儂く断ち切る。

もはや最後の一人となった『運命（リメイン）』は、もうこれまでと居直ったのか、振り返りながら黒剣をかざし、地面を身を潜めて走っていくと、ミネルバに飛びかかった。それは絶妙な技で、残忍な喜びに満ちた目が輝き、笑み綻んだ唇は血を吸ったように赤く燃え、振り下ろした黒剣は見事にミネルバの脳天を叩き割るかと思えた。

だが。

『甘いう、集団でない「運命（リメイン）」とは』

ミネルバが物憂げに呟くと同時に白く美しい手が差し伸べられ、思いもかけぬ豪胆さでがっと黒剣を刃ごと掴む。はっとしたイルファ達の目の前で、鈍い振動と黄金の光が、ミネルバの手から剣へ、剣から『運命（リメイン）』へと走った。

「！！！！」

耳を裂くような悲鳴を上げて『運命（リメイン）』が体を弓なりに反らせる。その体に光のひびの
ようなものが走ったかと思うと、次の瞬間には『運命（リメイン）』はみるみる焼け縮れたような黒
い塊に変わってしまう。

『これでは、私の花婿にはふさわしくはないのう』

さも残念そうなミネルバの声に、ケジェがぞくりと身を縮める。

その気配に気づいたように振り返りながら、ミネルバは手を離し、『運命（リメイン）』の死骸が
崩れ落ちるのにまかせた。

『怯えておるのか、そなた』

くすくす...と、人の心の脆さを嘲るような嗤い声を漏らして肩を震わせ、ミネルバはたおやかな白
い手で手綱を握りしめた。

『無理もない、私と面と向かって意見するのはアシャぐらいなものだからな』

そのことばと同時に、ミネルバの虚ろな眼窩の奥に禍々しいものが躍った気がして、イルファがご
くりと唾を呑んだ。

ミネルバの白い骨の造作には、表情というものはほとんど感じられない。だが、相手が今にも哄笑
しかねないほど上機嫌なのはまざまざと伝わってくる。死の女神か、魔界の狩人か、甘く暗い褥へと、
その白い手で幾人の犠牲者を誘い込んできたのだろうか。陥れられた人間は、彼女が振り返って素顔
を見せるまで、その体に秘めている惨い結末に気づくことはなかつただろう。

『アシャはどこにいるのだ、我が狩を望んでおきながら、見物にも現れぬのか』

冷やかななかからかいを込めて陰鬱な声が問いたです。だが、もちろん返すべき答えなど誰も持って
いない。

『まあよい』

ミネルバはやがて鷹揚に言った。

『いずれまた、相見えることもあろう。アシャにそう伝えるがよい』

おぞましい戦利品を山積みにした馬をゆっくりと巡らせ、それらの悲惨さ重苦しさと対照的なほ
ど軽やかに、金髪と薄水色のドレスをなびかせて、ミネルバは地平の彼方、まだ夜が色濃く漂う方角
へと去って行った。

「ふ...う...」

見送った者の中から、示し合わせたように重く暗い溜め息が漏れる。

「あれも.....ラズーンの一部なんだな」

イルファの声は寒々としたものになって、明け始めた夜に響いた。

ゆらり、とテオ二世の体が一步前へ動いた。

「テオ」

嫣然と笑み綻ぶミルバの笑みが、より一層広がる。

テオの背後で待つアシャは目を細めて、それでもことばを呑んだ。

「ミルバ...」

さっきまで響いていた阿鼻叫喚は、次第におさまってきてはいるものの、時折、人の心をひきむし
り号泣するような悲鳴が上がっている。

ふっと一步、続いてもう一步、テオがミルバに近づく。テオのグレイの瞳は、彼の心の煩悶を映し
て暗く、乱れたプラチナ・ブロンドに煙る顔の輪郭の線がずいぶんときつくなっている。

「テオ」

ミルバは玉座を降りて、いそいそとテオの側に駆け寄った。そうしながら、テオ二世の背後で黙然
と事の次第を眺めているアシャに嘲笑を投げかける。

ぐっとアシャはきつく歯を食いしばった。

「ミルバ」

一瞬、テオ二世は立ち止まった。右手がアシャに預けられた剣を弱々しく探りかけたが、やがて力
なくだらりと垂れ下がる。

「イ・ク・ラトール（誰よりも愛しい人）」

ことばが震え、瞳が潤んだ。

テオがどれほど酷な選択に耐えているのかは、誰の目にも明らかだ。彼は自分の死と王国の滅亡か、
父母と最愛の人の最も無惨な死か、どちらかを選べと言われているのだ。

「父君.....母君...」

再びテオは両親に目をやった。濁って生気のない目で笑み返す父母に、優しく哀しい視線を投げる。

「あなた達はぼくを大事に育てて下さった。誰より慈しみ、誰よりも守って下さった」

低い掠れた声がテオの唇から漏れる。

「その御恩を忘れるわけではない、また、忘れることなどできない……けれど、ミルバは誰よりも愛しい人（イ・ク・ラトール）……」

そのことばを聞いたミルバの瞳が嬉しそうに輝いた。

「だから、この方法を取ったとしても、許して下さいませね……？」

テオはミルバに左手を差し伸べた。作り物の人形の笑みも、これほど虚しいものはあるまいと思えるような微笑を満面に広げ、そのテオの腕にミルバが身を投げる。

と、そのミルバの顔が強張った。

「…え…？」

のろのろとテオを見上げる。

「辺境区の紋章、イワイヅタは、親株と切り離されても育っていくんだ、ミルバ」

まっすぐ前を向いたテオのグレイの目は、窓から見える明けていく空に向けられている。

だが、彼が見ているのは別のものだった。

荒涼とした大地に建てられている、眩いまでに白い塔、イワイヅタの浮き彫りが、その壁面を見事に覆う…。

「君には話したことはなかったね」

テオは引き攣った顔で彼を見上げるミルバに視線を落とした。つうつと、その瞳から澄んだ涙が溢れて頬を伝い、ミルバの髪へと零れ落ちていく。

「古来、辺境区の王子は、そのイワイヅタの習いに従って育てられる。分かれたそのとき、既にイワイヅタが別株として己の生を全うするように、王子もこの世に生を受けたそのときから、自分の生を貫くためなら親を振り返る必要はない、そう教えられて育つ…」

テオの瞳の優しさと裏腹に、その口調は切なく、終わりを知ったように静かだった。

「それが、己以外に守ることのできない、辺境区の掟なんだ」「！ …あぐっ」

突然、テオの右手が鋭く動いた。

ミルバが体を強張らせ、自分の体が力を失ってずるずる崩れ落ちるのを押しとどめようとするように、テオの腕に縋る。その華奢な背中から、どす黒い煙が立ちのぼり、見る見る範囲を広げていく。耳にしたくない音――泥状のものが、かろうじて保っていた形をふいに崩したような――が玉座の両側で起こり、辺りの空気が腐臭に満ちた。

零れ落ちる涙を拭おうともせず、じっとミルバの体を支えていたテオのプラチナ・ブロンドに、その日最初の朝日が砕ける。それと同時に、ミルバの体は、まるで土くれの人形のように、テオの両腕を擦り抜けて転げ落ち、崩れ落ちていった。

「……」

体がなくなっても、ミルバを抱いていたテオの左手は丸く優しく空を抱いていた。

そして、その何もなくなった空間に、テオの右手もまた空に浮いている、アシャの短剣をミルバの体に深々と突き立てた形のままだ。

朝日が『紅（あか）の塔』の中に差し込み、部屋を明るく照らし出していく。

テオは小刻みに体を震わせ、やがて、短剣を取り落とした。両方の掌を顔に当て、押し殺した泣き声を立て始める。

「……」

アシャは気配を乱さない静かな動きでテオに近づき、そっと床に落ちた短剣を拾い上げた。泣き続けるテオを見つめ、厳しい顔で剣を収めながら窓辺に近寄る。

美しい朝焼けが広がっていた。

空は聖堂の大伽藍のように神々しい厳かな輝きをたたえ、生きとし生ける者全てに祝福を与えようと両手を広げているようにも見える。雲が一切れ二切れ、空の端を彷徨っている闇の子のように、頼りなく浮かんでいた。

地上に目を転じると、すでに屠られた人々の屍の赤黒い泥の流れは、土と砂に吸い込まれ始めていた。

だが、その中に『運命（リマイン）』らしい姿はほとんどない。『狩人』が獲物として持ち去ったのだろう。

（ミネルバらしい）

アシャは皮肉な笑みを浮かべた。

（喜々として死を弄ぶ）

いやそもそも、この世界の成り立ちこそが、命を弄んだゆえの所行の結果ではないのか？

吹き込む風に乱れる前髪に、アシャは目を細め、

「……？」

ふと、何かに呼ばれたような気がして振り向いた。

「！」

凍りつく。

『白の塔』の基底部に、いつの間にか黒い影が群がり寄っている。

閃光のように、イルファと合流した時の会話が思い浮かんだ。

『あんまりうざいから、少々脅しをかけといたぜ』

自慢げな口調。

「まさか」

「アシャ？」

まだ涙声で、それでも流れた涙だけは何とか拭き取ったテオが、アシャの変化に気づいて近寄ってきた。

「あれ、は」

同じように『白の塔』を見やって固まる。

「テオ…残してきたのは何人だった？」

こちらに全て囲い込めるはずだった。

「確か……十数名…」

「兵は！」

声が叩きつけるように強くなってしまふ。

「五名です！」

恐らくはミルバも馬鹿ではなかったのだ。イルファの脅しに何が潜んでいるのかを考えていた。そして、アシャ達の攻撃が近いと察し、先手を打つべく兵を回していたのだ。

アシャ達がこちらに迫る間、手薄になるだろう本拠地を叩くべく。

体中から血の気が引いた。

「テオ！」

「わかっています！」

二人は身を翻し、階段を駆け下り始めた。瞬く間に、入り口のイルファ達の元へ辿りつく。

「おいアシャ、何をそう慌てて」

「やられた！」

「何？」

「『白の塔』だ！ 先手を打たれた！」

アシャは険しく空を見上げた。

薄紅に染まる高みに白く空間を切り取って、悠々とクフィラが滑空している。

「サマル！」

鋭い口笛でサマルカンドを呼んだアシャは、腕に一旦休ませる間も惜しむように、その足に金の短剣を掴ませ、急いで放った。

「ユーノに渡すんだ、行けっ！」

いつになく激しい調子の主人の命令に、サマルカンドはすぐに高く舞い上がった。そのまま、どんな力自慢の者が投げた石つぶてでも出せるまいという速度で、『白の塔』を目指していく。

「大丈夫ですか?!」

隠しておいた馬に駆け寄り跨がって、テオが問いかけてきた。同じように馬に乗るや否や駆けさせながら、アシャは首を振る。

「わからん！」

ユーノのことだ、少しは持ちこたえてくれるかもしれない、かもしれないが。

(それも、限界がある！)

「...くっ」

自分の甘さと愚かさに歯噛みする。

いくら天賦の才があったところで、傷の痛み能耐えながらレスファートを庇い、しかも塔の上に追い詰められていくという不利な状況で戦い抜くことが、どこまでできるというのだ、『運命(リメイン)』相手に。

「女性...ですもの...ね...」

さすがに息を切らせながら追隨してくるテオがつぶやいた。

びくりとして、とっさに振り返りながら、アシャはイルファ達の位置を確かめる。かなり後ろに置き去っている、聞こえてはいないはずだ。

(だが、こいつは知っている)

ふいに、祝福、ということばがアシャの脳裏に蘇った。ついでに、大抵の場合、辺境区の『祝福』と呼ばれる行為は『口づけ』だという、あまり嬉しくないことまで思い出してしまう。

「あなたは.....知っていたんでしょう？」

顔が歪むのを感じた。

「イルファは知らないが」

暗に知らせるな、と釘を刺すと、当然だという顔でテオが頷く。

「どうして...もっと.....守ってあげないんですか」

乗り手の心を映すような険しい蹄の音が響く。

「あの人は...女性扱い.....されることに.....慣れていない...」

二頭の馬は互いの力量を競い合うように走り続ける。

「.....このあたりの娘でも.....知っている.....礼を受けることさえ.....不慣れだ」

殺気を帯びた低い声がつぶやく。

「手がずっと.....震えていた」

無意識に、アシャは唇を噛んで顔を背けた。

(手を取ったのか)

俺より先に、こいつはユーノの手を。

(ユーノが手を預けたのか)

心が乱れる。

テオのことば一つ一つに苛立つ自分が居るのを意識して、痛みを感じる。それに伴い、集中力が薄れていく危険な兆候さえも。

「女性は.....守られるべきだ.....っ」

アシャの煩悶を見抜いたように、テオが激しく詰った。

(ならばお前は)

ミルバを守ったのか。いや違う、そうじゃない、それが問題ではない。

「.....っ、ふっ」

意識的に呼吸を強く吐いて気持ちを切り替える。

こんなところで、しかもユーノの危機に、自意識過剰の暴発など起こしている場合ではない。

目の前に『白の塔』が見る見る迫りつつある。

乱れ泡立ち殺気立つ気持ちの方向を、テオから切り離す。精神制御は視察官(オベ)の本能、『どれほど愛しい娘であっても、生きて再び会いたいならば、まずは己が生き抜くこと』、視察官(オベ)の訓練を行うときに、冗談まじりで呟かれる警句が、今重く痛みを伴った刃としてアシャの胸に突き刺さる。

(生きていてくれ)

胸に溢れるのは血の味がする願いだ。

(俺が辿りつくまで、生き延びていてくれ)

前方を見据え、剣を抜き放つ。

「そこから先は...っ」

世界を滅ぼそうとも、俺が守る。

「ユー...ノオおおおっ！」

迸った雄叫びに、テオが震えたのを感じた。

2. 『白の塔』の攻防

「くっ...」

追い詰められて、ユーノは部屋へ逃げ込んだ。すぐに引きずり寄せた机や椅子で扉を押さえつける。その場しのぎにしかならないことは重々わかっていたが、レスファートを庇いながらでは身動きが取れない。

窓の外にはバルコニー、いざとなれば飛び降りるしかないだろう。だが、それができるほど体が保つかどうか。腹の傷の痛みは、そうやすやすとユーノを解放してくれていない。

「あつつ...」

「だいじょうぶ、ユーノ」

「うん.....だけど、どうして奴ら、こっちへ来たんだろうな」

流れ落ちる汗を拭いながら、ユーノはそれに応じる憶測を口に出すまいとした。

(まさか、アシャ達がやられた、なんて...)

締めつけてくるような痛みで右脇腹を押さえながら、つつい目を閉じそうになる。

剣は血と脂に塗れてぼつぼつ役に立たなくなってきた。

窓から入って来る朝日が眩い。傷の痛みを耐えるのと、走り回っていたせいで、汗がとめどなく流れてくる。息苦しさに喘げば傷の痛みがひどくなり、呼吸を押さえると肺が焼けつきそうになる。手足に力が入らなくなってきたいて、さっき『運命(リメイン)』の剣を受け止めたときには、危うく剣を取り落としそうになった。

こんな状態でよくもレスファートを連れてここに逃げ込めたものだ。

(もつか?)

大きく息を吐いて、ユーノは壁と窓枠に腰をもたせかけ、両膝に手を当てて体を休ませた。座り込むと次には立てない、そんな感覚に腰を降ろせない。閉じた瞼の上を流れた汗が、目にしみ込んでひりひりする。

「ユーノ...」

不安そうなレスファートの声に、目を開けた。

目の前に澄んだアクアマリンの瞳が大きく見開かれている。心配そうな色を一杯にたたえて、さすがのようにこちらを見つめている。やや紅潮した頬に乱れた銀糸のような髪をそっと払ってやりながら、ユーノは微笑んでみせた。

「大丈夫.....少し休めばもつよ」

半分は自分に言い聞かせたつもりだが、答えたとたんに腹から痛みが駆け上がり、思わず顔を背けて呻いた。額に冷たい汗が吹き出て、体がぞくぞくする。腹からの出血は止まっていない。失われていくのは命と同じ、貴重な水分と気力だ。

「ユーノ！ 傷、みせて！」

反応が鈍いユーノに不安になったのだろう、レスファートが叫んだ。

「大丈夫、だったら」

「だめ！ 見せて！」

「...っ」

レスファートがユーノの手をこじ開けるようにして傷を確認し、息を呑む気配があった。ここに来て以来身に着けている淡い色のチュニックの右脇腹は、鮮やかな紅でずくずくだろう。外された手をすぐに戻せず喘ぐことしかできない。ごくり、と唾を呑み込んだレスファートがそっとチュニックを開いてくる。ぬるり、と開かれた場所から新しい血が流れ落ちていくのがわかって、また昏い霧が額に降りてくる。

「まって！」

レスファートが急いでベッドに走った。シーツを引っ張り落とし、剣と口で必死に引き裂く。よれよれの、それでも何とか作り上げた包帯を手に戻ってきて、ユーノの傷にあてがい、何とか強く巻き付けようとしてくれる。

「、あり、がと」

呼吸を整えた。布を一所懸命押さええている小さな手にそっと手を重ね、見上げてくる涙で一杯の瞳に笑み返す。レスファートに手伝ってもらいながら、包帯をきつめに腹に巻き締めた。チュニックの前をのろのろと合わせ、腰紐をその上から強く巻く。

「少しは、もつ」

締め付けられた痛みより、それで補強された感覚があるのはまずい。思っている以上に疲弊しているし、血が足りなくなっている。

ふらつく体を起こすと、レスファートが寄り添って支えてくれた。柔らかくて温かなぬくもりに一瞬の憩いを得る間さえなく、扉の外で激しい音が響き出した。どしん、どしん、とぶつかる音、ぎしぎしときしんで膨らむ扉、いよいよ押し入ってくるつもりらしい。

「こっち...」

レスファートに支えられながら、窓をバルコニーへと開け放つ。扉を睨みつつ、後じさりして、穏やかに輝かしく降る夜明けの光の中に立つ。

(いよいよ、最後の戦い、か)

冷たくて寒い覚悟。

脳裏を掠めるアシャの笑顔、セレドの父母やレアナやセアラ、動乱の世界はなるほど辺境の小娘が擦り抜けるには荷が重かったということか、それでも。

(他に方法なんかなかった)

少しでも生き延びる道を探し続けて、それがこの背後に頼るものもない虚空にしか繋がっていないなら、それでも十分に頑張った方なのだろう、とレスファートの小さな頭を見下ろす。

(何とか、レスだけでも)

考えろ、レスファートを逃がせる方法はないのか。

と、

「クエアアーツ！」

空を裂く鋭い声がユーノの耳を貫いた。

「、サマルッ！」

振り仰ぐユーノの目に、上りつつある太陽を背に白いクフィラの姿が影絵のように見えた。みるみる急降下してくるその足に、何かきらきらするものが掴まれている。ふらつく体を支えながら、剣を握った右手を伸ばしたところへ、サマルカンドが体重を殺して舞い降りてくる。

「これ...アシャの...！」

思わず声を上げた。

サマルカンドの持って来た黄金の短剣を受け取る。長剣を捨て、それに持ち替える。

(アシャは無事なんだ)

短剣は汚れていない。生気に満ちて輝いている。

(アシャが、生きてる)

そう思うだけで、体に新しい力が湧いてくる。

「クエアツ！」

「何？」

サマルカンドが叫び声を上げて翼を広げ、金色の目を『紅（あか）の塔』に向けて数回羽ばたいてみせた。

「ああ、そうか、アシャ達がこっちに向かっている？」

「クエツ！」

ユーノは『紅（あか）の塔』に目をやった。

基底部から少し手前、砂煙を上げて『白の塔』に近づいてきつつある一隊を確認する。

「助かったよ、サマル、お前がもう少し大きければ、私を運んでもらうんだけど...」

労ってやりながら、ふと気づく。

「お前、レスなら運べる？」

「クウ？」

「ユーノ！」

レスファートがざらりと目を光らせた。

「だめ！ ユーノ一人のこして行けないもん！ ユーノけがしてるじゃないか！ 一人でいたら、ユーノは！」

込み上げてきた涙をこらえ切れずに、ぶん、と強く首を振って、再びユーノを睨み上げる。

「ユーノ、死んじゃう！」

「違うって、レス」

ユーノはせつかく巻き締めてもらった包帯を解き始めた。

「万に一つでも生き残る可能性があるなら、それに賭ける」

「何するの、ユーノ！」

解かれるシーツは既に朱に染まっている。レスファートが悲鳴を上げてすがりつこうとする。

「いいかい、レス」

乱れかける呼吸を何とか整えた。

「あそこはもう、もたない」

扉を指差す。間もなく破られるだろう。一刻の猶予もない。

「サマル、ここを掴んで」

もがこうとするレスファートの肩をサマルカンドに掴ませる。服の上から、それでもぎちりと握られて痛そうに顔をしかめるレスファートの胸にシーツを巻き、サマルカンドの足に結ぶ。

「ここは狭い。私達二人がいたら、必ずどちらか一人、まずくすれば二人ともやられてしまう」

飛び降りるなら命はあっても大けがをする。けれど、サマルカンドに減速してもらえれば、軟着陸できるはずだ。

「アシャが短剣を届けてくれたから、これでかなり頑張れるよ」

黄金の短剣を示して微笑んだ。

「だから、レス、アシャの所に先に行って、待ってて」

「でも、ユーノ！」

体に巻かれたシーツの紅に体を強張らせていたレスファートは、身をよじらせてユーノの腕を掴んだ。

「ユーノ！」

ばき、と嫌な耳障りな音がして、扉が壊れた。隙間が開くのをもどかしがるように、怒声と歓声を上げて、荒くれた様子の男達が押し入ってくる。

「いやだ、ユーっ」

「レス...っ、お願い...っ.....行けっ、サマル！」

レスファートを何とかバルコニーの手すりへ押し上げ、座らせ、クフィラに命じて背中を向ける。

「クエ...ッ！」

肩越しに、レスファートの重さに一旦がくりと沈みながら、それでも翼をきしらせるようにゆっくりと、サマルカンドが舞い上がる。

「ユーノおおお！」

悲鳴のようなレスファートの呼び声に、ユーノは少し苦笑し、振り返って見送った。

明るい空に遠ざかっていく姿に安堵の吐息を漏らす。

今度ばかりはどこまでもつか、ましてやレスファートと無事再会できるかどうか、全く保証がない。

「いたぞ、あそこだ！」

「いた！」

背後に響き渡る蛮声に、ことさら泰然と振り返る。一瞬止まっていた右脇腹の血が、堪えかねたようにびちゃりとチュニックの内側を濡らしながら零れ落ちる。

「...」

無言で剣を構えた。喘ぐ呼吸を少しずつ整える。

先頭に立っているのは見覚えのある『運命（リマイン）』の真紅の瞳、それが右手の黄金の剣を、続いてユーノの目をまっすぐに捉える。

両者の呼吸がふっ、と重なった。

（来る！）

次の瞬間、ユーノと『運命（リマイン）』の剣はお互いの命に牙を立てた。

「レス！」

アシャは『紅（あか）の塔』と『白の塔』のほぼ中間でへたっているサマルカンドと、それと絡み合うようにもがいて暴れているレスファートを見つけた。

「運んだのか、サマル。よし、よくやった...」

アシャの褒めことばは、レスファートの体に巻き付いている、目を射るような紅の布に途切れる。

「はやくほどいてよ、アシャ！ ユーノがあぶないの！」

じたばたするレスファートの体から、ようようシーツの切れ端らしい布を取り去る。それは赤と朱と紅のまだらに染め分けられ、ところどころにねっとりとした血の塊さえこびりつかせている凄惨なものだった。

「ユーノの...ほうたいなの...」

馬に乗せられたレスファートが、馬の腹を蹴りつけるアシャに泣き出しながら訴えた。

「きずに...してあげた...ばっか...なのに.....すぐに.....だめになっちゃ.....」

しゃくりあげる少年を、アシャは片手で強く抱きかかえてやった。怯えたように体を震わせながら、レスファートがしがみついてくる。

「ユーノは今どこにいる？」

「バ、バルコニー...っ」

掠れたレスファートの声に、より顔をしかめて唇を噛む。

(月獣(ハーン)の傷さえ癒えていないのに)

胸をかきむしられるような痛みが感覚全てを支配していく。

(俺がまだ治しきっていないのに)

これほどの無力感を味わったことなどない。

(今また一人で、敵刃に晒されて.....こんなに血を流して)

ぎり、と無意識に噛み締めた歯が嫌な音をたてる。

(俺が、ようやく、血を止めてやったのに)

引き裂かれた傷を一つ一つ手当して。

(ようやく、動くときに顔を歪めなくなって)

なのに、また。

(そして、また、俺は側にいない)

「アシャあ」

縋るようなレスファートの声に我に返る。

「しゃべるな、レス、舌を噛むぞ」

それでなくても、後の者が追いつけないほど馬の速度を上げている。

それでも、レスファートは必死にことばを続けた。

「ユーノ...だいじょうぶ.....だよね.....？」

「当たり前だ」

(それを、俺に確かめるのか)

大丈夫でなくてどうする。自分が辿りつけない間に、ユーノを失ってしまったなら。

生きている間に紡ぐ全ての祈りの力を、今この一瞬に集められるならば、今のアシャは何を引き換えにするだろう。

(命か、世界か)

レスファートを抱えた体を出来る限り馬の背に伏せて、アシャはひたすらに『白の塔』を目指した。必死に追いついて来た左右のイルファとテオも強張った顔、三騎の蹄が大地を削り、砂埃を舞い上がらせる。目の前の『白の塔』が引き寄せられるように、みるみる間近に迫ってくる。

「サマル、ユーノを！」

「クェアッ！」

クフィラが白い翼を剣の刃のように閃かせて、バルコニーへと空を翔た。

「イルファ！ テオ！ 基底部へ！」

「おうよ！」

「はいっ！」

二人が残りの配下を引き連れて『白の塔』基底部の入り口に突っ込んでいく。

それを横目に、アシャは少し離れた所で馬を止め、片手を真上に上げた。

これほど頭の回りがよくて次の手を的確に打ってくるなら、もう一つ先まで打たれている可能性がある。そちらを止めておかななくてはならない。

「アシャ？」

「...黙って」

「う...ん」

不審げなレスファートを制し、アシャは目を閉じた。

額に乱れ落ちてくる髪から、吹き付けてくる荒々しい風から、ユーノを襲っているだろう刃も、この一瞬は頭から閉め出し、気持ちを整え研ぎすます。一歩間違えば、この場を違う空間に落ち込ませてしまう。

「視察官(オペ)の任として、この地を止める、アシャの名のもとに」

「アシャ...？ あ...っ」

アシャの片手から溢れた金色の光に、レスファートが小さく声を上げて目を閉じた。光は目に見えぬほどの薄い膜の波動となって、アシャ達を取り巻いて揺れ、やがて、二つの塔を含む辺り一体を覆う黄金の天蓋となる。明け方の空を遮り燃え上がらせる金の布に、ようよう薄目を開けたレスファートが目を見張る。

「アシャ……これ……なに……？」

「今にわかる」

曖昧な笑みでレスファートを逸らそうとしたが、相手が揺らがない瞳で凝視しているのに苦笑した。

「…外からの敵を封じた。もっとも、中のものを外に出さない力もあるが」

自分が『運命（リマイン）』に破れることはあり得ない。最悪ただ一人生き残るなら、それはアシャに決まっている。

だが。

（ただ一人、なら）

そこにユーノの命がないと納得することなど、きっとできない。

万が一、アシャが『暴走』したのなら、『太皇（スーグ）』率いる『泉の狩人（オーミノ）』が駆けつけるか、野戦部隊（シーガリオン）が包囲するまで、致命的な破壊を封じなくてはならない。

（自ら放ったオーラに包まれて消滅する）

それも構わないと、既に自分の中では結論が出ていることだが。

（世界を永遠の闇で支配するぐらいなら）

あの渺々と寒い草原の遺跡でそう決めた。

（所詮、産まれるはずのなかった命に、幸福な未来など望めるはずもなかったのだと）

「でも、アシャ」

殺伐とした思いに沈みかけたアシャを、レスファートが呼び戻した。

「ぼくたち、どうして出ればいいのか？」

きょとんとした表情はアシャの絶望を透かし見た気配はなかった。最愛のユーノの危機に見事駆けつけた、だからきっと間に合うはず、だからきっと皆で、この二つの塔から再び旅を始めるのだ、そう信じて疑わない瞳に虚を突かれた。

「あれは、なくなるの？」

黄金の天蓋がしずしずと広がり落ちてくる様子を指差す。

「…そのときは」

「うん？」

「封印を解く」

「ふういん？」

なおも問い続けようとしたレスファートの声は、響き渡ったイルファのどら声にかき消される。

「だめだぞ、アシャ！」

基底部でのやりあいに手こずりながら、珍しく弱音を吐く。

「こいつら、どこにいやがったんだ！ 手練ばかりで、とても上まで辿りつけねえ！」

アシャが見やれば、イルファだからこそ報告できる余裕がある状態、テオは押し寄せる相手に呑まれまいと必死だ。

同時に、下からの迎撃が伝わったのだろう、バルコニーでの剣戟が激しさを増し、思わずはっとする。

「ユーノ！」

ほっそりとした人影が一人、バルコニーの端に追い詰められていた。円柱の間から見える下半身が妙に赤黒いばかりか、攻撃を避け、躲し、受け止めるたびにバルコニーに叩きつけられる、その手すりにべったりとした黒い汚れがなすり付けられていく。

「ユーノッ！」

背筋を駆け上がる悪寒、あれは血、ではないのか。

バルコニーの人影にアシャの叫びが届いたのだろうか、ふっと一瞬肩越しに振り向きかけた、その隙に打ち込んだ相手の剣を受け止めたのは短剣、金色の光が殺気立った横顔を照らす。

（まちがいない！）

「イルファ！」

バルコニーを凝視したまま、馬を寄せていく。

「何としてでも敵を減らせ！」

「その、つもり、だが、な！」

手近の四人をぶっ飛ばし、再び基底部の入り口に突進しながら、イルファが叫ぶ。
「テオ、行くぜえ！」

「くっ…」

ぎりっ、とユーノの手元で剣が鳴った。

のしかかってくる『運命（リメイン）』の赤い目がぎらつきながら、ユーノの心を射抜く。

ずきずきと絶え間なく、同心円の波紋を描くように広がる痛みは、持ちこたえようとするユーノを、体から心からぐずぐず崩して形のないものに変えていきそうだ。

遠くの方で新たに剣が触れ合う激しい音と怒号が響く。

「この野郎！」

がらがらした喚き声が聞こえて、ユーノははっとした。

（イルファ？）

「スート！ ネル！ 来い！」

テオ二世の聞いたことのない厳しい声も耳に届く。

（来て、くれた！）

そう待つまでもなく、ユーノが逃げ込んだ部屋になだれ込んで来て、ユーノを狩ろうと詰めていた『運命（リメイン）』や、その支配下（ロダ）の者達とたちまち乱戦状態になる。

（助かるかもしれない）

今まで感じたことのない、淡い興奮が胸に広がる。

思わずそちらをちらりと見た『運命（リメイン）』が両手で持っていた黒剣から片手を放した。隙あり、と一気に剣を押し戻そうとして体を起こす。

だが次の一瞬、放した片手を引き戻した『運命（リメイン）』が、痛烈で的確な一撃をユーノの右脇腹に打ち込んだ。

「つうっっ！」

視界が真昼の太陽のように灼ける。仰け反り崩れる体が止められない。

テオが叫びながら敵を倒し、何とかユーノに近づこうとしているが、彼に倒せるのは『運命（リメイン）』支配下（ロダ）の人間のみ、ユーノの回りを幾重にも取り囲んでいる『運命（リメイン）』までは辿り着けないようだ。

「くう…っ」

バルコニーの手すりに縋りつくように倒れ、ユーノはのろのろと目を上げた。下半身と周囲は流れた鮮血で染まり、『白の塔』の白い石と対比して鮮やかな紋様のような。天空高く駆け始めた太陽は、無惨な光景を一層はっきりと照らし出す。

（終わりか？）

ついに、ユーノの旅はここで終わるのか。

（まだ、何もわからない、のに？）

「…っ、っ」

よろり、とユーノが手すりが掴んで立ち上がるのを、『運命（リメイン）』は手を出すこともなく、ほくそ笑んで待っていた。背後の増援は小物と見切り、ユーノが立ち上がったところを再び打ちのめし、圧倒的な勝利を得ようとも言うのか。

（く…そ…）

ユーノはかさかさになった唇を噛んだ。

体はぬめぬめと粘りつくような熱さで覆われている。傷を押さえている左手を真っ赤に染めて、固まることさえ忘れたように、限りなく血が流れていく。

（暗いな）

どんどん明るくなっているはずの空さえ、人の子の運命を指し示しているのか、どす黒く濁って見えた。

ふわり、とユーノの片手が泳いだ。手すりにかけていた方の手、かろうじて短剣を握っていた手が、ついに力を失って支えられなくなったのだ。傾いでいく視界で『運命（リメイン）』が大口を開いて囁いている。

(おわり...)

こんなにあっけなく、こんなに無力に。

(これが...おわり)

絶望さえも遠くに感じるほど。

(.....)

恋しいただ一人の名前さえ、思い出せなくなるほどに。

「...あ...」

今にも気を失おうとするユーノに耳に、突然はつきりと、誰のどんな声よりはつきりと、一つの声が響いた。

「ユーノ！」

「っ...」

鮮やかな紅の光。

体を貫く稲妻のような、その声。

(アシャ...)

冷え固まろうとする意識が溶けた。視界が少し、戻ってくる。

ゆるゆると振り返れば、バルコニーの下に、その姿があった。

灰色の世界に目を射るほど眩く煌めく黄金の髪。朝日に光をまき散らしながら、真下の地面に脚を踏ん張った相手が、両手を差し伸べて叫ぶ。

「飛び降りろ！」

(飛び...降りる...?)

ぼんやりと心の中で繰り返す。華やかで美しい姿、それを眺める幸福だけに落ち込みそうな感覚が、少しずつことばの意味を読み取り始める。

(飛び.....降り...る...)

不意に、背中に風が当たった。振り向く前に、無防備な背中に向けて振り上げられた『運命(リマイン)』の剣の動きを感じる。

(!)

かろうじて避けた体から髪一筋のところを黒剣の切っ先が打った。度重なる衝撃で限界に来ていたのだろう、打った場所から、ガララッと不気味な音をたてて手すりが崩れる。

「っ！」

休む間もなく降ってきた『運命(リマイン)』の剣を、短剣を両手で支えて受け止める、傷ついた腹部が隙だらけで大きく開く、それを待っていたように『運命(リマイン)』の手が伸びてくる。その一撃をくらえば最後、ユーノの意識は体もろとも砕け散るに違いない。

ふ、と。

突然、ユーノの頭の中が空白になった。

静かで透明な空間。

遮るもののない渺々と白い世界。

沈黙と、静謐。

次の一瞬。

「.....つつっ」

いきなりすべての意識と感覚がその空白になった部分に注ぎ込まれ叩き込まれ、呑み込まれ、圧倒される。

自分の顔が表情を消したのがわかった。脚がゆっくりと振り上がっていく。動かしているつもりがない。吸い寄せられる、あるべき場所へ、あるべき瞬間へ。しかも、それに目の前の『運命(リマイン)』が全く気づかない。視界に入っているはずなのに。これほど間近にいるのに気づかないはずがない、なのにやはり、その腹部へ爪先が滑らかに突き刺さるまで、ついに『運命(リマイン)』は気づかない。

「、っぐえっ！」

声を吐いた『運命(リマイン)』の顔は驚愕に歪んでいる。思いもかけない衝撃に手から黒剣が抜け落ちると同時に、ユーノの短剣は動いている。まるでそれを予想していたかのように、落ちてくる剣の切っ先をこちらの剣の切っ先一カ所で払いのけるという離れ業、続く一動作で翻した刃を相手の胸に突き立てる、それさえも、まるで予め描かれた軌道を辿るように整然と。

「ぎえあああああっ！」

『運命(リマイン)』は耳を裂くような悲鳴を上げた。

「...え.....？」

瞬きしてユーノは我に返った。既に短剣を引き抜き、次の攻撃の構えに入っている自分、なのに『運命（リメイン）』はまだ、仰け反り崩れ落ちていつている最中だ。

（なに.....？）

「っっ...」

その彼方に茫然としたテオの顔が見えた。表情が語っている、何が起きたのかわからない、と。

明らかに追い詰められていた、明らかに生き残るのは不可能だった、明らかに全てはもう遅かった、なのに。

なのに。

「！！！」

周囲を囲んでいた『運命（リメイン）』が顔を強張らせ引き撃らせて一斉に引いた。その動きのただ中に、ようやく、今倒した『運命（リメイン）』の体がどさりと落ち、短剣に刺された部分から異臭を放つどす黒い煙を吹き上げる。

（生き残った...？）

なぜ。

ユーノもまた呆然とする。

（なぜ、生き残った？）

なぜ、あの攻撃に対応出来た？ なぜ、あんな露骨な反撃を『運命（リメイン）』は避けられなかった？

（まるで、見えなかったみたいに）

でもあれほど近くにいたのに、そんなことがありえるのか？

（それとも）

見えていても防げなかったのか？

（そういえば）

アシャに教えてもらっていた時、どうしても対応出来ない攻撃があった。速さではない、鋭さではない、時には、それが来るとはっきり見えていても、どうしても防げなかった。あれをユーノは自分が疎んだのだと感じたけれど、アシャは奇妙な笑みを浮かべて、それには同意しなかった。

（今のと同じ？）

反撃不可能な攻撃。

そんなものがあるのだろうか。

「っ！」

ぼんやりとした視線を囲む『運命（リメイン）』に向けると、その方向の『運命（リメイン）』が体を引く。別方向へ視線を転じると、そこでもまた。ぎらつく真紅の瞳が見据えて怯えているのは、短剣ではなく。

（私...？）

なぜ。

「ユーノっ！」

ばらついて混乱していたユーノの意識を、外から呼ばれるアシャの声が引き戻した。

（アシャ...）

バルコニーにもたれかかりながら、のろのろと見下ろす。さっきよりもっと隙だらけの格好、なのに不思議と囲む『運命（リメイン）』の配置も、動きも、息づかいさえも全て読み取れた。今飛びかかれても、おそらくは一撃たりと外さない、そう『わかる』。

（なぜ）

これは、何だ？

強くなってきた朝風に髪が乱れて視界を遮る、迷いながら戸惑いながら瞬きを繰り返し、けれど、下でアシャが両手を広げて待っている、その光景だけがはっきりと見えた。

「あ...しゃ...」

無意識に、微笑む。

（もう、大丈夫なんだ）

「ユーノ！」

アシャの声が遠くなる。崩れたバルコニー、のめり込むように揺らいだ体が軽くなる。

(もう)

甘い、吐息。

もう、戦わなくていい。

その思いを最後に意識が砕けた。

「ユーノお！！！」

落下してくるユーノに、レスファートの悲鳴とテオの意味をなさない喚き声が交錯した。

短い舌打ちとともに、アシャは幻を残して走る。飛んでくれている、崩れ落ちた、バルコニーからなお内側に落ち込まれては命の保証がない。落下速度と位置を見誤らない自信はある、受け止める衝撃にも耐えてみせる、だが、紅の飛沫を散らして降り落ちる体を、どこまで無事に支えきれぬ。

「うおおおっ！」

唇を突いた獣の吠え声が自分のものとは思えなかった。猛々しく怒りに満ちて、伸ばした腕にユーノが触れた瞬間に衝撃を吸い込み、抱きかかえて重量を地に逃がし、それでも足りずに激痛に叫ぶ。

「くああああっ！」

ずしん、と地鳴りがした。レスファートが小さな悲鳴を上げて体を浮かせる。降った体の重量にもげかけた腕を引き寄せる、血まみれの、ずたずたの、意識を失ってなお重くなった、それでも細くて愛しくてかけがえないその体、二度と離さないと誓いながら、首筋に顔を埋めて胸に深く抱え込む。

「うっ...は...っ」

「ユーノ！ アシャ！」

駆け寄ってくるレスファートに喘ぎながら顔を上げた。

「レス！ 包帯！」

「はいっ！」

おそらくはアシャの顔も血に汚れているだろう、けれどレスファートは怯む気配さえなかった。真っ白になった頬に涙をぼろぼろ零しながら、引き抜いた短剣でシャツの端を切り裂いて包帯を作っていく。

「ユーノ？ ユーノ？」

声をかけながら、抱きとめた両手に生暖かく広がるぬめりに顔をしかめる。

(呼吸はある)

青ざめている、浅くて速い、けれどまだ息はしている。

「ユーノ！」

意識はない、四肢を弛緩させ、完全に気を失っていて、触れてもぴくりとも動かない。

(傷はどうだ)

腰を落とし、膝に抱え、チュニックを開き、溢れる血に傷を確かめ、次々と止血剤を塗りつけ接着剤を張りつけ包帯で固定していく。月獣(ハーン)の傷が抉られていた。刀傷は無数、打撲はあるが骨折はない。レスファートが巻いた包帯で少しは防御できたのだろう、汚れた傷が思ったより少ない。

(輸血が欲しい)

栄養剤の点滴が欲しい。止血剤も追加したい。内蔵の傷も確認したい。今のままではユーノが意識を回復してくれないと判断しかねる。センサーが欲しい。安全に眠れるベッドと感染管理と失った体温を戻すための設備と。

「ちっっ」

ないものねだりをする自分の頭に嫌気がさして舌打ちする。

かた、と緩んだユーノの手から短剣が落ちる。ユーノの冷えてくる体を自分の衣服を脱いで包みながら、レスファートに命じる。

「拾っておいてくれ」

「うん」

レスファートはこわごわ短剣を拾い上げた。柄の部分は赤黒く固まりかけた血で汚れている。強張った表情のまま、それを拭き始めたレスファートは、ふいに自分が流している涙に気づいたようだった。その涙を擦った布で短剣を拭き始める、まるで涙で清めようとでもするように。

それを見やってから、アシャは塔を見上げた。まだ戦いは続いており、『運命(リメイン)』とやり合う叫びが響く。

(まだ始末がつかない)

不愉快きわまりない、ユーノを早く休ませてやりたいのに。

「イルファ！ テオ！」

一気に片付けるしかない。

「『白の塔』から離れろ！ ここを封じる！」

アシャの声は獣の王者を思わせる荒々しきで響き渡った。理由を問う声はしなかった。たちまち『白の塔』の中で今までとは逆の騒ぎが起こった。脱出しようとするイルファ達と入り交じるように『運命（リメイン）』達が転がるように飛び出してくる。

（そうだ、慌てろ）

アシャはそれを冷ややかに眺める。アシャがこの地を封じるという意味を知らない『運命（リメイン）』などいない。

「アシャ！」

「ユーノは大丈夫ですか！」

イルファに続いて、顔のあちこちに傷を作ったテオが飛び出してきた。その前後に次々と仲間が走り出してくる。

「ネルは？」

追いかけてきた敵を一太刀で倒したイルファの問いに、スーツが首を振った。

「ゲルトもキートも、待たなくていい...っ」

トラブが報告しながら、喘ぎつつ駆け寄ってくる。『運命（リメイン）』達はもうこちらに向かってこない。ひたすらに遠ざかる、大いなる災厄から逃れようとするように。

「逃すか」

アシャは冷笑して立ち上がった。

「視察官（オベ）の任として」

「！」

続けたことばに周囲が固まった。テオもイルファもぎょっとした顔で振り向いたが、それを無視して右の掌を『白の塔』に向ける。

正確には、『白の塔』と、そこから逃げ出していく『運命（リメイン）』の一群に向けて、だが。

「この地をとどめる、アシャの名のもとに」

ことばが途切れた瞬間、あたりとぼんやりと霞ませていた金色の膜がするすると『白の塔』を中心に凝縮し始めた。自分達のすぐ側をふわりと舞い上がるように通り抜けていく金の帳に、テオ達が驚いた顔で身を竦ませ、きよろきよると見回す。

膜の中に囲い込まれていく『運命（リメイン）』達の間にも動揺が走った。膜が自らに向けて集まってくるのに、絶望的な唸り声上がる。膜は集まり、濃く厚くなるにつれて、次第次第に輝きを増す。

「あ...ああっ」

「うわっ...」

イルファ達が声をあげて顔を背けたほど激しい輝きになった膜は、『白の塔』を巻き締め、包み込み、まるで金の炎で燃え上がらせていくようだ。ごうごうと唸る音の中に微かな悲鳴が交錯し、渦巻く巨大な光が天空へ向かって駆け上がっていく。

一瞬のことか、それとも感じたより長い時間がたったのだろうか。

光の膜は、やがて輝きを増した時と同じように、徐々にその眩さを失い始めた。やがて正視できる状態になったとき、そこにはもう、ただ一人の『運命（リメイン）』の姿も、その死骸さえも見当たらなかった。

「す...ごい...」

テオがようようことばを絞り出す。

「.....こんなことができるなら、最初からやってくれれば助かったんだ.....もっとも」

俺達も一緒にきれいさっぱり消されてるか。

イルファがうすら寒い声でつぶやく。

「この塔は封印された」

静かに右手を降ろす。広範囲の出力、疲労も強いが、これだけ派手なことをやっていれば、好ましくない輩にアシャここにあり、と触れ回ったも同然、だがそれでもユーノを少しでも早く休ませてやりたい。

そっとユーノを抱き上げる。何か言いたげなテオを振り返る。

「俺が解かない限り、未来永劫、何人たりともここに入ることはできない」

国の一部を封じて済まなかったな、辺境の王。

「...いえ」

謝ると、テオは僅かに目を伏せて首を振った。

(ふ...)

どことも知れぬ中でユーノは目を覚ました。暗い色、暗い空間。どこかで聞いたことのある高笑いがあたりの闇に飴している。

(そうだ.....私...怪我を...)

そろそろと脇腹にて手を滑らせると、ぬるっとした手触りがあった。まだ出血しているらしい。

(くそっ.....ここは.....どこだ?)

瞼が重くてすぐに塞がりそうになる。眠気に耐えて周囲を手で探してみたが、何も触れない。ここへどうやって来たのか、それさえもよく思い出せない。

(私は一体どうして.....確か、レスとあの部屋に追い詰められて...)

ゆっくりと思い出した。絶望的な気分だった。もう最後だ、そう思っていた。

(サマルカンドがきて.....そうだ、アシャの剣!)

閃光のようにことばが蘇った。

思わず飛び起きると、痛みが全身に広がった。

(つ、うっっ!.....)

しばらく感覚の奔流に耐えていると、足下に何かがぬめりつくような妙な気配がした。

(なに.....っ)

それは赤い蛇だった。

子どもの手首ぐらいはあろうかという太さ、いやらしく鎌首をもたげてユーノの両脚に絡み付き、ずりずりと這い上ってきている。ざらざらとした鱗の感触、まとわりつき締め付けられて身動き出来ない脚の重さ。チロチロと動く真紅の舌に体中が総毛立つ。

ふと、視界の端に金色の反射があるのに気づいた。慌てて振り向くと、手が届くところよりほんの少し離れた場所に、アシャから託された短剣が転がっている。

(まずい!)

ユーノは寝そべり、重くて動かせない下半身を引きずって掴もうとした。体が伸びる、その無防備になった腹へ、いきなり思いもかけない速さで蛇が飛び込んできて、傷口へと牙を立てる。

(わ、ああああっ)

激痛が稲妻となって身体を貫き、声を上げて仰け反った。呼吸が止まりそうになって、必死に喘いで痛みをこらえる。

やがて衝撃が去ると同時に、手足から力が抜けて崩れ落ちた。ぐったりと寝そべったユーノの体の上で、赤い蛇は満足そうに舌を蠢かしながらとぐろを巻いている。

(は...あ...)

荒い息を吐きながら、目を閉じた。汗が滴る。また、流れ出していく貴重な水分、汗と血と.....涙と?

(...同じことを考えていた、あの時)

バルコニーに追い詰められ、『運命(リメイン)』から一撃を食らい、手すりに崩折れた時だ。

(アシャの声が聞こえて...)

だが今、アシャの声は聞こえない。

(バルコニーの外へ倒れて.....私は死んだのか?)

「っっ!」

ふいに、目に見えない何ものかに両手首を押さえ付けられ、体を強張らせた。動かない脚はもとより、体の自由をことごとく奪われ、首がかろうじて動かせるだけだ。

赤い蛇がまたずるずると這い上ってくる。月獣(ハーン)の攻撃に傷ついた怪我の部分を見つめ込む。

(くる...)

再びの激痛を恐れて、無意識に体が竦むや否や、空中で光った白い閃光が傷口へと降ってくる。

(あ...うっ)

唯一動かせる顔を背けた。食いしばる歯、嘔んだ唇から血が流れる。乱れる呼吸、速まる鼓動.....
そして、いきなり、重力は現れたときと同じように唐突に消えた。

(は...あっ.....)

深い吐息をついて、ユーノは緊張を解いた。

疲労感が寒さを伴ってやってきていた。身動き一つままならない。

蛇はどこかに行ってしまったらしく、姿がなかった。

瞬きを繰り返したが視界は戻らない。闇が目の前まで覆うだけだ。その中で、ぐっと首を支えて顎を上げられ、口元を拭われた。指が唇に触れ、柔らかく開かされる。ひんやりと舌を刺してくる水の感覚が口の中に広がった。

(冷たい...)

喉を鳴らして水を飲む。自分が渴き切っていたのだと気づく。

続いて、何かほんのりと温かな液体が入ってくる。

(スープ...?私は誰かの手当を受けているのか?)

意識は戻ってきているのに、どうして体は自由にならないのだろうか、とユーノは思った。視界もはっきりしない。目を閉じたまま、唇にあたった濃いところみのある液体を呑み込む。ゆっくりと喉を通って、胃の腑に落ち着いていく。

(ああ.....おいしい...)

つぶやいて、ユーノは思わず体を震わせた。寒さがふいに強くなった気がする。

ユーノはいつの間にか、闇に降りしきる雨の中に一人転がされている。体に布がかけられた。だが、それも雨が叩き、みるみるぐっしよりと重く冷たい塊に変わっていく。そのまま埋葬されていくような気がする。

冷たく体を凍てつかせていく雨。

(寒い...)

まるで石になっていくようだ。こんな暗い場所でたった一人、置き去られて見捨てられるなんて。

(いや...だ...)

無意識に伸ばした手を誰かが握ってくれた。だが、何かを思い出したように手が離れかけ、慌てて指を伸ばした。

(行かないで...)

すぐに再びしっかりと、凍えた指先が受け止められてほっとする。

相手はユーノが震えているのに気づいたようだった。そっと、手から腕へ、腕から肩へ、肩から首へ、そして顎へとためらうような温もりが移動してくる。

やがて、少しの間をおいて、唇に軽く何かが触れた。

さっきの指よりもっと柔らかくて温かくて、どこか甘い薫りがするもの。

(なに...?...)

知っているような、全く知らない何かのような。

(今のは.....?)

暗闇の中に転がるユーノの傍らに、ぼうっと白い人影が浮かぶ。

(アシャ?)

影はどうやらじっとユーノを見下ろしているようだ。

(ごめん.....アシャ)

襲ってくる眠気と戦いながら謝った。

(短剣を手放してしまった.....あそこにあるけど.....でも.....私...どうしてか起きられなくて.....取りに行けないんだ.....ごめんね)

大丈夫だよ、と影は囁いた。

ほら、ここにある。

影が示した片手に、確かに短剣が光っている。

(よかった...)

吐息をつく。

寒くないか、と白い影が問いかけてきた。

(うん.....寒い.....少し...)

応じるように、ふわりと何かが優しくユーノを包み込んできた。布とは違う、不思議に心を寛がせてくれる温かさ、しかもしっとりとした熱の感触がある。

まだ寒いかな？

声が静かに尋ねてくる。

(ううん.....寒く...ないよ.....)

こんな温かさに包まれてたなら、寒さなんて感じないよ。

ぼんやりと夢見心地でつぶやいて、目を閉じ、するすると柔らかな空間に吸い込まれていく.....。

目を開ける。

(あれ...?)

ユーノが考えたのは、今やっと眠ったばかりなのに、どうしても目が覚めてしまったんだろう、ということだった。

「.....」

状況の把握がうまくできない。頭のどこかが抜け落ちてしまっている。あるいは、視覚がどうにかなってしまったのかもしれない。

自分がベッドに横になっている、というのはわかった。顔の半分が深々と枕に沈んでいる。

視覚がどうにかなったのではないかと考えたのは、視界の残り半分の視界に、一人の人間がこちらを見つめて微笑しているからだ。今までそんな間近に人が居て、こんなに深く眠り込んだ覚えなどない。

ひどく綺麗な紫色の瞳だった。虹彩がきららかな太陽の光を含んで透かし、青紫とも赤紫とも言えぬ微妙な色合いに揺れている。中心に据えられた瞳孔の漆黒は、果てしなく奥へ視線を吸い込み、目が離せなくなる。

妖しく色を変える二粒の瞳がはめ込まれているのは、女性的な整った顔立ちで、笑みを浮かべた唇の形も色も極上品、特別な果実を魔法で凝縮して閉じ込めた、そんな透明感をたたえているのに生き生きと輝いている。

瞳や唇から感じる線の細さは、内側からにじみ出て来る鋭さときわどく釣り合っていて、脆い感じを与えない。強さも弱さも全てを同時に満たしているような、それでいて、何か一つ突き崩されれば、たちまち得体の知れない闇の気配に溶けそうな不思議な表情だ。

(人では...ない...?)

まるで何か特別な意図、例えば神に捧げるために作られた細工物、そう言われても納得してしまいそうな、生身を越えた美の結晶。

けれど、日差しの中で艶やかに輝くその顔が、呆然と見惚れるユーノの前でゆっくりと笑みを深めた。

「やっと目が覚めたか」

「っ！」

聞き覚えのある深い声が響いたとたん、ユーノは跳ね起きようとして、小さく呻いた。

「こら...無茶をするな」

ふわあつ、と眠そうにあくびをしたアシャが、のんびりと制する。

「っ、っ、っ」

言われるまでもなく、ユーノは全身を襲った痛みを体を抱えて沈没している。

その横で、アシャは両手を上に上げて気持ち良さそうに伸びをし、それで今まで保っていた緊張が途切れたと言いたげに、疲れ切った顔で元の場所に腕を落とした。

「あ」

ようやく痛みを堪え切って、顔を上げたユーノは、見る見る顔が熱くなるのを感じる。

その腕の位置はどう見たって。

(私、アシャの腕枕で眠ってたんだ！)

しかもアシャの上半身にかかっているのは、ユーノの下半身にかかっている同じ布一枚、つまりは同じ床で体を寄せ合って眠っていたのだ。

「わ...っ」

体中に広がった熱にうろたえて後じさりしようとしたユーノに、アシャは気息そうにつぶやいた。

「三日三晩...意識がなかったんだ」

ふう、と甘やかな息を吐いて目を閉じる。額に金髪がさらさらと流れ、いつもより白く見える肌に疲労が見えた。目元にうっすらと隈が浮かんでいる。それが彫りの深い顔立ちに一層妖しい翳りを落としている。

「さすが.....俺も...疲れ.....」

もごもごと幼い口調でつぶやいた唇が、ふんわりと頼りなく開いたままで動きを止めた。そのまま、いくら待っても続きを話そうとしない。

そればかりか、気持ち良さそうに解けた表情が、どんどん邪気なく緩んでいく。

「.....アシャ？」

とろとろと蕩けていく甘い顔に魅入っていたユーノは、戻らない返事に我に返った。

「あれ...アシャ、だったの...？」

「ん...？」

鼻にかかった眠そうな声が応じる。

「寒いって.....いった.....ろ...」

確かに言った、けどまさか、それに応じてくれて？

「ずっと、ついててくれたの？」

痛くて渴いて寒かった。和らげてくれて潤してくれて温めてくれた、それはまさか、自分の素肌で？

「.....」

どうして、そこまで。

「アシャ？」

ひょっとして、ここまでしてくれる、その理由は。

ごくん、と思わず唾を呑み込む。

そんな事はあり得ないはずだ、だけど、この状況は、仲間という関係を越えているはず、だから。

「アシャ」

「.....」

答えがなくなってしまうと、そっと乱れ落ちたアシャの髪をかきあげた。

アシャは長い睫毛に光が当たっても目を開けない。すうすうと健やかな寝息をたてて、ぐっすり眠り込んでしまっている。よっぽど眠かったのだろう、小さな男の子の顔だ。すべらかな頬に陽が跳ねている。

「っ...」

平和そうなアシャの寝顔に目を奪われていたユーノは、ぶり返した傷の痛みに我に返った。少しためらったものの、そのままもう一度、アシャの隣に体を横たえようとして動きを止める。

「.....」

アシャは深く眠っている。

きっと今なら、何をしてもわからない。

何をされても.....拒めない。

「.....」

唇を噛んでしばらく考え、やがてそろそろとユーノはアシャの顔に近づけた。唇を尖らせ、そっとアシャの額に押し当てようとする。

(お礼、だから)

言い訳だとはわかっている。

(いいよね?)

だが、もう少しで唇がアシャの額に触れるというところで、ふいに胸の中に冷たい声が響いた。

誰に許可を得るつもりだ？

「っ」

脳裏によぎったのは白い手、微笑みも鮮やかなセレドのレアナの姿。

「ふ...」

小さく嗤った。

(私は、ずるいな)

想いを寄せて叶わない相手が抵抗できない隙を狙うなんて。

軽く首を振り、顔を離す。

(姉さまが側に居ないからって)

アシャを起こさないようにそろそろと隣で横になる。

(温かいや)

ほう、と静かに息を吐いて目を閉じる。

柔らかな熱、とくとくと響く心臓の音、さっきまでの凍えた夢に比べれば、その前に追い詰められて乾燥した孤独な戦場に比べれば、うんと安らかで落ち着ける。

(ここに居られれば.....いいよね?)

たとえアシャが誰を好きでも、声さえ聞ければ、笑顔さえ見られれば、ましてやこんな風に疲れ切って傷ついた体を隣で休められるなら。

(それ以上は望まないよね?)

もう十分じゃないか、それに。

(こんなに近くても)

同じ布一枚で身を寄せ合っている、アシャは穏やかに安らかに眠り続けている。

(私は、アシャにとって特別な存在じゃない、ってことだ)

心ときめかせる相手なら、これほど側に居て、それ以上を望まないはずもないだろう、ユーノが今揺さぶられたように。三日三晩付き添ってくれた、それはユーノが重傷だったせいもあるだろうが、何より大事な女性の大切な身内、そういう位置にしかいないからだろう。

(アシャ.....兄さん、だよ)

きっと他のどんな娘よりも近くにはいる、けれど、決してユーノが願う触れ合いには届かない。

「.....」

目をきつく閉じ、体を締め、しがみつきたくなる衝動を堪えて、そっとそっと、額をアシャの胸に寄せる。

(ここまで)

ここから先は。

(姉さまの、もの)

だから、それを守ることこそ、ユーノの気持ちの証。

「...わ」

「へ？」

ふいに、思いもかけない声が響いて目を開けた。体を起こして、戸口に立ちすくんでいるテオに気づく。

テオは妙に赤くなってうろたえた顔でユーノを見ている。

いや、ユーノ、ではなく、一つ寝床に入っていて身を寄せ合っているユーノとアシャを見てうろたえている。

「ユーノ.....あなた.....いや、それは別に」

どもりながら意味不明のことばをつぶやいたテオが忙しく視線を泳がせるのに、相手が何を誤解しているのかわかった。かあああつ、と見る見る体中の血が沸騰する。

「つまりあなたはアシャとはそういう」

「ちがーうっ！」

戸惑いを弾くようにユーノは全身で否定した。

十数日後。

(封印された『白の塔』に『紅(あか)の塔』)

ユーノはゆっくり首を巡らせて、二つの塔を交互に見やった。仮住まいにしている少し離れた場所の、国境を管理する大臣達の家からは、二つの塔が運命を語る一枚の絵のように見える。

(救済と破滅)

自らを律して運命を選ぶか、『運命(リマイン)』に組して自らを放棄するか。

「ユーノ」

背後からの声振り返ると、テオが穏やかに笑っていた。

「御気分はいかがですか」

「もうぴんぴんしてるよ」

起きる事を許されたのは四日前、それまで十日以上もベッドから動くことさえ禁じられて、別種の拷問のようだった。

テオはユーノの側に並び、見ていたものに目をやった。

「二つの塔、ですね」

「大変だったね」

ユーノの声にテオは少し黙り込んだ。

風に舞うプラチナブロンズを指先で押さえ、塔を、そしてその上に広がる彼方の空をじっと見上げ

る。

「辺境のイワイツタは、水も養分も与えられないところに育ちます」

静かな低い声が響いた。

「その種が持っているのは、いつも己のもつ生命力だけです」

亡くなってしまった人を、無くなってしまった繋がりを愛おしみながらも悔やまない、強い意志を含んだ声だった。

「ぼくら辺境の人間も、そのように生きることを、いつも自分に課しています。個の価値のないものはここでは暮らせない.....ぼくもこれからが自分の命です」

ユーノは無言で頷いた。

「ユーノ」

「うん？」

「あなたは...」

言いかけて一瞬ためらい、やがて吹っ切るようにテオは続けた。

「ぼくの気のせいであれば、あなたが生死の境を彷徨っている時に求めたのは、アシャだったと思うのですが」

まっすぐな問いに、ユーノは思わずテオから目を逸らせた。

『白の塔』を、続いて『紅（あか）の塔』を見つめる。

追い詰められ、殺されかけた。

たった一人で、けれどそれは、いつものことで。

けれど今度は、目覚めるとアシャの腕の中に居た。

安らかで、恐怖に怯えることもない、夢のような時間。

(でも)

あれは幻。

(あんなことは.....二度と起こらない)

胸に強く言い聞かせる。

(二度と)

「テオの気のせいだよ」

きっぱりと言い放つ。

「ユーノ...」

テオが眉を寄せた。

「何かだめな理由があるんですか？ あなたの想いを妨げるようなことがあるんですか？」

(無神経だよ、辺境の王)

ユーノはテオを振り返った。にこりと笑って、

「違うよ」

迷いのない声で言い切ろうと決めた。

「私はアシャを好きだけど、テオの言うような意味じゃない。兄さんみたいに、ずっと付き合っている友人みたいに好きなんだ。テオもアシャを嫌いじゃないだろう？ おんなじだよ」

(そうだ、そういうことだ)

揺れた想いは悪夢が見せたものだ。孤独に耐えかねた心が描いた儂い夢だ。

(そう、決める)

これ以上卑怯者にならないために。

「.....あなたは強い方ですね」

テオはグレイの目を陰らせた。

「.....うん」

もう一度、笑った。

「ユーノ」

テオは片足を引き、唐突にユーノの前に跪いた。

「あらためて礼を取らせて下さい。そして、ぼくを祝福してくれませんか、イワイツタの枯れぬように。ぼくはあなたの強さにあやかりたい」

「...私でよければ」

ユーノは左手を差し出した。

テオがそっとその手を押し頂き、甲に静かに唇を押し当てる。けれど、唇を離してもすぐには手を放さずに、低い声でつぶやいた。

「アシャでは勝ち目がありませんからね」

「え？」

「いえ」

テオが笑って立ち上がる。

「強くなろう、そう言ったんですよ」

「ユーノ！」

バルコニーの下から声がした。覗き込むと、レスファートがびよんびよんと飛び跳ねている。

「行こうよ！ もう準備できたって！」

「わかった！じゃあ、テオ、いろいろとありがとう」

「ご無事で.....あなたなら...」

さぞ立派な辺境区の王になったでしょうね、ユーノ。

静かに続いたテオの声を、ユーノはもう聞き取れなかった。

アシャが、イルファが、そしてレスファートが新たな旅路の支度を整えて待っている。

(進もう、前へ)

「お待たせ！」

「おお、ずいぶん待ったぞ！」

「いいお天気だよ！」

「.....調子がおかしくなったらすぐに言えよ？」

瞳を細めるアシャに片目をつぶる。

「私を誰だと思ってる？」

セレドのユーノ・セレディスだよ。

「.....わかってる」

アシャが一瞬切なげに笑ったのに、行こう、と声をかけて背中を向けた。

3. 麦の女王

「考えたんだが」

アシャが切り出したのは、キャサランを出て隣国のアグナイに入り、二日ほどたった夜のことだった。

乾いた空気は冷え冷えとしたものを含んで、人に火を恋しがらせる。起伏の多い平原の赤茶けた土の上で、組んだ木が勢い良く燃え上がり、馬の背の荷物を解いているイルファや、小さな棒と木の皮で遊んでいるレスファート、じっと炎を覗き込んでいるユーノを照らし出している。

香ばしい薫り、樹液が炙られ爆ぜる音、揺れ動く光と影。

「これから、ラズーンへ近づくに従って、これまで以上に『運命（リマイン）』の攻撃が激しくなってくるだろう」

自分の声に重い響きが混じらなければいいと思いながら、アシャはことばを継ぐ。

「正直なところ、無事にラズーンへ着くには、かなりの苦勞がある」

サマルカンドの報告では、既に旅の途中で視察官（オペ）ともどもに屠られた『銀の王族』さえ出始めたとのこと、これまでにない事態にラズーンも増援を考えるかもしれないとあった。

（そんなことなど、なかったのに）

びく、とレスファートが一人遊びの手を止め、アシャを見つめた。淡い色の瞳に不安げな、何かを我慢しているような表情を浮かべる。

それに気づいたらしいユーノが、そっと手を伸ばして慰めるように少年の髪に触れた。旅の汚れにもかかわらず、指の間でさらさらと鳴る髪をまさぐり、不安を追い出すように少年の体を引き寄せる。

ほっ、と小さな溜め息をついて、レスファートはユーノの側にすり寄った。体をユーノの組んだ膝にもたせかけ、肘を枕代わりに頭を乗せる。それでもまだ、レスファートの目は警戒するようにアシャを見つめている。

「だから、宙道（シノイ）を使おうと思う」

「シノイ？ 何だ、そりゃ？」

イルファが不審げに眉をひそめた。

「視察官（オペ）が旅を速める時に利用する道だ」

わけがわからない顔で瞬きするイルファの横で、ユーノが問いかける。

「普通の道じゃないの？」

アシャは曖昧に笑った。

「まあな。その道を通れば、国の一つや二つ、半日もかからないで越えられる」

「それでか！」

イルファが大きく頷いて叫んだ。

「おまえが、歳の割りにはあちこち広い範囲を巡っているのは！」

「...そういうことだ」

痛い部分に触れられて、一瞬顔が歪むのを感じた。

「どうして今まで使わなかった？」

旅もうんと楽だったろうに。

「それは...」

イルファの不満そうな声に説明しかけた矢先、

「それはね」

ふいにレスファートが口を挟んだ。

「その道をつかうの、すごいセイシンリョクがいるんだ。その道をあけたままにしておくのにも力があるし、とおる人がおおいほど、力があるんだ」

支配下（ロダ）の人間が宙道（シノイ）の知識を持っているわけがない。ましてや、レスファートが宙道（シノイ）について、耳にする機会があるとは思えない。

「レス...」

アシャの愕然とした声に、レスファートは凍りついた。瞬きして、怯えた顔であたりを見回す。

「ご、ごめんなさい、アシャ。ぼく、そんなつもりじゃ.....よむ、つもりなんか.....なかったんだ」

瞳にみるみる涙が溜まってくる。

「ああ...気にするな」

「ぼ、ぼく、この、あいだからへんなの.....なんか.....いっぱい声が.....はいつてきて.....なんか.....こ

わいんだ」

レスファートはがたがた震え出していた。ぎゅっとユーノの膝にすがりつき、必死な顔で彼女を見上げる。

「ユーノ……ユーノ……ぼく……あのとき……ユーノが死んだとき……たすけにいかなくちゃならないとき……なんか……いっぱい……いろんなものがいっぱいで……ぼく……ぼく……！」

小さな悲鳴を上げて、レスファートはユーノの膝に突っ伏した。体中を大きく震わせて、蒼白な顔になっている。

「レス！」

呆気にとられていたイルファが慌てて駆け寄ってくる。

「た……すけなきやって……たす……たすけなきやって……大きくなって……大、大きく……」

微かに漏れるつぶやきに、そういうことか、と気づき、アシャはレスファートに近づいて静かに声をかけた。

「レス？ レスファート？」

「ユーノが……たすけてっ……って……ぼく……ぼく……」

「どうしたんだ！」

「イルファ」

喚きかけたイルファを黙れ、と目で制し、アシャは少年の顎を掴んで顔を上げさせた。

「アシャ……」

不安そうなユーノの声に頷き、カタカタと細かく歯を鳴らしながら、こちらを向いてはいるのに、視線はアシャより遙か後方の彼方を見つめているレスファートを覗き込む。もしやと思って手にしていた小さな袋から白い錠剤を出し、レスファートの間に挟み込むように押し入れ、水を入れた。

「む」

「吐くなっ」

とっさに吐き出そうとしたレスファートを一喝、掌で少年の口を押さえる。目を大きく開いたまま、レスファートがごくりと音とたてて薬を飲み下す。見守るユーノとイルファの前で、アシャは穏やかな低い声で囁いた。

「レス？」

少年の閉じられていた瞳がゆっくりと開く。

虚ろに光を吸い込んで霞む淡い青。

「いいか、レス」

その開き気味の瞳孔の奥を意識で貫くように見つめながら、アシャはことばを継いだ。

「お前は俺達の仲間だ。なくてはならない人間だ」

「おい、アシャ、何を……」

「しっ」

口を挟みかけたイルファをユーノが制した。

ぱちぱちと爆ぜる焚き火の横で、レスファートはアシャに向き合ったまま、じっと体を硬直させている。

「お前がいなくなれば、どんなに寂しいだろうな。仲間ってというのは、一人が何もかもできなくちゃならないものじゃない。一人ができないことは、他の誰かができればいい。それが仲間なんだ」

なだめるように優しい声を意識して、レスファートの追い詰められた心に送り込む。

ことばの意味が伝わっているとは思えない。だが、レスファートは心象を読める。アシャのことばに含まれた感情は確実に届くはずだ。

「でも……」

夢の中にいるように、レスファートはぼんやりと口を動かした。虚ろに遠い視線がアシャを通り越し、アシャの声を頼りに、何か違うものを探し求めているようだ。

「ぼく……ユーノ…すきなのに……だれより……すきなのに……ぼくは……ゆーのをまもれない……」

新たな涙が瞳に盛り上がり、頬を伝って零れ落ちた。

「いつだってぼく……ゆーのにまもってもらってばかりだ……」

「それでも、ユーノはお前を……必要としている」

(少なくとも……俺よりもうんと)

胸に動いた切ない想いを押し殺す。

「ユーノはお前を嫌ったりしない」
(俺を好きになることは、ないかもしれないが)
危うい感情、これほど年下の者に向けるには気まずい嫉妬も、今この際には利用できる、アシャ・ラズーンという男は。

「ユーノは俺が守ってやれる」
事実だけを述べる声に優しきは含ませない。
「だが、俺はなかなかユーノの側にはいられない」
(拒まれるだけ、疎まれるだけ)
傷ついた自分の弱さは晒して残し、ユーノを恋うる少年の優越と自信に繋げる。
「今度だって、お前が知らせてくれなければ、俺はどうにもできなかった」
それは現実、動かし難い冷酷な事実。
アシャ一人ではおそらくユーノもろとも全てを屠った可能性の方が高い。
(愚かな、兵器でしかない、男)
だから、あれほど側に居て、あれほど手当に全身全霊尽くしても、ユーノはアシャの危うさを見抜いて寄り添ってきてくれないのだ、きっと。

「ほんと...？」
「ああ」
本当か、と問いかけた、その真実の意味を理解したのは、おそらくレスファートの中にある特殊な力とアシャだけだ。

「ほんと.....ユーノ.....？」
ふらりと体を揺らせて、レスファートはユーノを振り返った。
「レス...」
ユーノもまた、思い詰めた顔でレスファートを見つめている。
「ぼく.....なにもできなくても.....ゆーの...ぼくをきらわない.....？」
「誰が、いつ、レスを嫌いだと言った？」
唇を噛んで爆発しそうなのを堪えていた、そんな表情のユーノがついに叫ぶ。アシャの前で頼りなげに竦んでいるレスファートを引き寄せて抱き締める。
「ボクがレスを嫌うはずないだろ！」
「ゆーの...」
抱かれるままになっていたレスファートがしゃくり上げた。
「レスが好きだよ」
ユーノが低く囁く。
「謝るのはボクだ。守れなくてごめんよ、でもレスが大好きなんだ」
のろのろとレスファートは両手を抱擁から抜き出した。そっとユーノの首に回す。本物かどうか確かめるようなあやふやな動作、次の瞬間、力の限りしがみつく。
「ぼくもすき！ ユーノがすき！ ユーノ！ ユーノ！ ゆー...」
声が突然途中で途切れ、がくりとレスファートが崩れ落ちた。
「レス！」
「大丈夫だ、薬が効いただけだ」
ぞっとしたように叫んだユーノを、アシャは静かに応じた。
「しばらく抱き締めててやってくれ。今夜は一緒に眠っていてやったほうがいい」
俺には与えてくれない、その優しい抱擁で。
「少し.....休ませてやってくれ」
つぶやいて、アシャは胸の内を過った苦い声に顔を伏せて立ち上がる。
「荷物を降ろしてくる」
「わかった」
レスファートを抱きかかえるユーノの横顔から顔を背けた。
(休みたいのは俺だがな)
できれば一晩、ユーノ自ら差し出してくれる胸に憩って。
「おう、手伝うぞ」
「頼む」
追いかけてくるイルファに振り返らないまま応えて、不安になった。
(気のせいだろうか)

俺はどんどんみっともない男になっていく気がする。

「アシャ……一体レスはどうしたんだ？」

泣き寝入りしてしまったレスファートのあどけない寝顔に目をやりながら、ユーノは尋ねた。

「『運命（リマイン）』の心理攻撃の後遺症、といったところだな」

「こういしょう？」

なんだそれは、食い物か、とイルファが妙な突っ込み方をしてくる。

「レスは毒物か何か盛られたのか」

「違う。……想像だが、月獣（ハーン）の一件で、ユーノが殺されるのを心の中で見たレスファートは、自分ももっと力を持ち、もっと早く成長することを望んだんだろう、無意識に。無理な許容範囲の拡大をしていたところに、心理攻撃の傷と、現実の危機が重なった」

アシャは微妙な表情になって付け加えた。

「過負荷になっていた。受け入れ過ぎていたんだ」

「……だから、『声がいっぱい』か…」

ユーノは抱きかかえたレスファートの乱れた髪を払い、涙の跡を拭き取ってやった。

「そうだ、それに」

アシャはより複雑な顔になる。

「レスがそれほどお前を想っていた、ということも一因だろう。かけがえのない相手を守れないという事は…男にとってはつらい」

「わかるなあ」

ユーノは思わず吐息をつく。

「大事な人を守れないのは…つらいよね」

「……そっちでわかってしまうわけか」

「え？」

「いや……」

アシャが一瞬固まって、深く大きな溜め息をつく。

「……でも、レスにどうしてやったらいい？」

今夜は休ませてやればいい。けれど、この先も旅は続く。月獣（ハーン）や、二つの塔のようなことは何度もあるだろう。その度に、レスファートが衝撃を受け動けなくなってしまうなら、よほど考えなくてはならない。

「他の人間にはどうにもできん」

アシャはもう一度溜め息を重ねた。

「自分で抜け出すしか、ない」

「……ゆーの…」

レスファートが小さくつぶやいて手を伸ばし、ユーノの所在を確かめる。眠る前と同じ場所に居ると知って安心したのか、すぐにすやすやと寝息を立て始める。

「さっき話してたシノイ、って」

ユーノは何事か考えに耽っているアシャを見やった。

「ああ、宙道、とも言われている。空間に道を開くんだ。幸いに、この近くの一つ、その出入り口があるはずだ」

（また、遠くなった）

空間に道を開く。

想像もつかないその手法を、アシャはこともなげに口にする。

（私には、理解できない何かを、アシャはずっと抱えてる）

アシャの中にある不可思議なもの。

おそらくそれを分かち合うのはレアナとだけ、ということなのだろう。

「じゃあ、それを？」

気持ちを切り替えて問いかけた。

「ああ」

寝息を立てているレスファートを、アシャはどこか諦めの混じったような瞳で眺め、ゆっくり瞬きして空を見上げた。

「レスが落ち着き次第、出発しよう」

空を埋めるように光っていた星の一つが、すうっと流れ落ちていった。

アグナイは麦の名産地だ。

小麦やレク麦などは言うに及ばず、アグナイでしかとれない、粒の大きな褐色の実りを揺らせるパデット麦、ゲト酒のもとになるゲト麦など、品質もよく種類も豊富なものが、今や国の三分の二以上を占める麦畑に豊かに実っていた。

ユーノはふと気づいて、さっきから苦虫を嘔み潰したような表情になっているアシャに問いかけた。「どうしたんだ、アシャ？」

そろそろ中天高くなった太陽は麦畑に照りつけ、褐色の波がうねる中を馬でゆっくり進んで行くのは気持ちよかった。なのに、アシャはついさっき通り過ぎた建物――それはどうやら、この辺りの村の守護神を祭っているらしい――を見てから、むつつりしたままだ。

「あ...ああ」

アシャはようやく眉根を緩めて、独り言のように呟いた。

「まさか、あそこにあんなものを建てるとはな...」

「？」

首を傾げるユーノの鼻先に、ぷんと甘い匂いが漂ってきた。彼女の前にちょこんと座っていたレスファートが、くんくんと子犬のように鼻を鳴らしてみても、歓声を上げる。

「おかしなおい！」

「上等な食べ物の匂いだ！」

イルファもはしゃいだ声を上げた。

「そういえば、腹が減ったな。おい、アシャ、あそこの村で何か食おうぜ」

「そうだな...」

イルファの誘いにも、アシャは今一つ関心を示さない。その肩にはサマルカンドが翼を休め、考え込んだ主人を不審そうに見つめている。始めはユーノの肩に乗ろうとしたのだが、小柄なユーノの肩には乗切れないと判断したらしく、アシャの元に戻ったのだ。

(アシャが悩んでるの、宙道(シノイ)のことかな)

ユーノはやっと慣れてきたヒストを手綱で操りながら気がついた。

視察官(オベ)が使うという宙道(シノイ)。

(空間に道を開く、なんて)

そんなことが人間業でできるとは思えない。

「どうやら、ここが酒場みたいだな」

ユーノの戸惑いをよそに、イルファはさっさと食べ物にありつけそうなところを探し出していた。

「酒も少しぐらいはいいだろ、アシャ」

機嫌よく馬から降りるイルファ、ユーノもヒストから降り、レスファートを降ろしてやる。

レスファートはまだどこか不安そうだ。ユーノがこの場で霧にでもなって消えてしまわないかと恐れるように、しっかりと彼女の首にしがみついて馬から降りた。

「レスが食べられるものもあるといいけど」

「おかしなおいがしたよ。おかし、ないの？」

「うーん.....あればいいけど」

馬の背から荷物を下ろすのに手間取っているイルファを置いて、木製の扉を押しかけたたん、アシャがいきなりうろたえた声を上げた。

「え、あ、待て、ユーノ！」

「え？」

單身店に入ってしまったユーノがアシャを振り返ると同時に、中からわあっという歓声が溢れ出した。

「?!」

「ああ...」

アシャが片手で目を覆って呻く。

「すっかり忘れてたな...」

うんざりした声でぼやく。

「何だ？」

「麦祭だ。とんでもないのにひっかかった」

アシャは澀んだ声で続ける。

「これで五日はここから動けないぞ」

「あん？」

間をばちくりさせたイルファ、がっくり項垂れるアシャ、思わずユーノにしがみついたレスファート、そして、ユーノはいきなり自分に向かって投げられた色とりどりの花とりボンと細かく千切られた香草の葉に、とっさに剣に滑らせた手をかろうじて止めて目を白黒させて立ちすくんだ。

大きな窓から日差しが一杯に入り込む明るい店内に、ぎっしりと人間が詰まっている。どの顔も好奇心に満ちて生き生きと笑っている。

「な、に？」

驚くユーノに、また楽しくてたまらないと言った笑い声が沸き起こった。

その中から、髪も髭も真っ白な、体格のいい訳知り顔の老人が現れ、温和な笑みを浮かべる。

「ようこそ、アグナイのティアンカへ、旅の人」

「ラズーンのもとに」

慌て気味に礼を返したユーノに、着飾った娘達がぐすぐすと堪え切れぬように笑う。

「男の子だわ」

「まあ、それじゃあしつかり仕上げなきゃ」

「可愛いわよね？」

「結構いいんじゃない？」

きよんとしているユーノに、老人は憐れむような微笑を向けた。

「失礼は許して下さい。しかし、アグナイの麦祭は有名なもの、知らぬ方が悪い、ということになりますな」

「アグナイの麦祭？」

老人のことばをそのまま繰り返したが、聞き覚えがない。

「そうして、見たところ、どうもあなたさまは少年らしいが、この祭りの間は女王を務めてもらいますぞ。それが『しきたり』でしてな」

老人はゆっくり頷いて平然と続けた。

「え…」

女王？

曖昧に笑っていた顔が強張る。ほほほほ、と娘達の笑いが大きくなる。

「えーっ！」

ようやく事情が呑み込めてきて喚いたがもう遅かった。賑やかな笑いとおしゃべりで、娘達がユーノを取り囲む。

「さあ、着替えてくださいな」

「綺麗に仕上げますよ」

「え、ちよ、ちよっとお！」

なまじ相手が敵でないだけに抵抗出来ず、あれよあれよと言う間にユーノは奥の別室に連れ込まれていった。

「つまりだな」

仕方なしにとりあえずは店の中に腰を落ち着けたアシャは、集まってくる娘達の視線をうっとうしく感じながら、溜め息まじりに説明した。

「アグナイでは、麦の刈り入れの前に麦祭というのをやるんだ。実った麦を喜び、三日から五日間、ばか騒ぎをする。麦の実り方で気づいてもよかったんだが」

再び溜め息をついた。

「ちょっと変わった風習がある。祭りの前日、村の集会場なんかに集まって、集まりの点呼が終わってから、出口の扉を開けた最初の者を、祭りの間の女王に見立てるんだ」

「待て」

イルファが眉をしかめた。

「ユーノは男だぞ」

「老若男女、関係なしだ」

ぼそりと付け加える。

「別の村で、よぼよぼの老人が女王になったのを見たことがある」

「でもよ、小さな村だろ？」

納得し切れない顔でイルファが問い返す。

「最初に扉を開ける者って、旅人ぐらいしかいないんじゃないか？」

「まあ、一番、旅の方が多いですな」

老人はアシャとイルファに再び酒と食物をすすめ、テーブルの上で手を組んでにこにこ笑った。「だが、たとえば、それとはなく村はずれになっている者のこともあります。そういう者には集会の知らせが届きにくいのでな」

「一種の、村の団結を高める祭り、というわけだ」

アシャは手にしたゲト酒の味を確かめ、頷いた。濃い黄土色の泡立つ酒からは、麦を炒ったような香ばしい薫りが広がってくる。かなりの上物だ。

「そうですね。麦の刈り入れは村を上げての仕事、その前に一同の気持ちを合わせておくのが麦祭ですじゃ」

「でも、はずれ者も旅人もいない時は？」

イルファが不思議そうに尋ねた。

部屋のあちらこちらから含み笑いが聞こえる。何度も麦祭を経験してきて、そういう場合にも出くわしたことがある者らしい。

老人ももちろん、その一人なのだろう、穏やかな笑みを少し控え、澄ました顔で応じた。

「集まる場所には、どうにも我慢できぬものを果たせぬところを選びますのでな。酒を振る舞って待つおれば、そのうち誰かが扉を開けて走って出ていきますわい」

「そいつあ、ひでえよ」

イルファが呆れた声を上げる。

く、くくっ、とアシャは笑った。

「それで、あいつはどうなるんだ？」

イルファは握りしめた骨付き肉で、くいくいと隣室を指した。

未だにそこではどたんばたと激しい物音が響いている。時々、うわっ、とか、ええっ、とか、挙げ句にボクがやるっ、とか悲鳴じみた声が上がっており、ユーノはかなり抵抗しているらしい。

イルファ達とテーブルについて、ふんわりと焼いた丸い菓子をかじっていたレスファートが、ちょっと心配そうにそちらを見る。

「まず、『女王』として最高に美しく装って頂いて、後は祭りの間、この村に滞在して頂くだけです」

「大変なのは村人の方かもしれないな」

アシャはにやりと笑った。

「それぞれの畑の持ち主の家から一人、候補者が出る。彼らはその『女王』にひたすら愛の告白を繰り返し、『女王』の心を射止めることに努力する。『女王』はそれに応えて、祭りの最後に一人を選んでキスをする。と、その候補者の畑は来期の豊かな実りを約束される、というわけだ」

イルファが妙な顔になった。

「候補って……男か？」

「はい」

老人が予期していたように頷く。

「ユーノ、男だぞ」

「ですから、老若男女おかまいなし、でしてな。それが麦祭ですわい。こんな拙い村長の下でもできる、我が村にはよい祭りだと思っておりますよ」

老人の満足そうな口ぶりには村の充実と団結を誇る響きがあった。

「けれども確か、『女王』が候補者を選ぶ前に、一つ肝試しが行われるんでしたね？」

「ほう」

村長は目を細めた。

「よくご存知ですな。その通り、今年は村はずれのティアンカ神の神殿奥、神像の前に火を灯してくるというのが行われます」

「ふうん、神殿奥のね」

アシャも笑みに目を細めた。ふと思いついたと言いたげにこやかに話を続ける。

「どうでしょう、村長。私も参加させてもらえないでしょうか、その肝試しに。もちろん、それまでの求愛に加わってもいいですよ。何せ、今あそこでどたばたやってる奴は生意気でしてね、この際、ちょっとからかってやりたいというのも本音で。祭りであれば騒ぎもしないでしょうし」

「ふうむ」

「おいおい」

イルファが呆気にとられた顔になる。対して軽く片目をつぶってみせて、アシャは重ねてねだった。

「いや、ご迷惑をかけはしません。あいつも、仲間を選ぶような無粋はしないでしよう」

「そうですね」

村長はふいと目をあげ、にこりと笑った。

「よいでしょう。どうせ、祭りの間はこの村に泊まって頂くのだし、何かと退屈されるよりは、そうして一緒に楽しんで頂いたほうがいいかもしれぬ。それに、祭りは恵みを分つもの、喜びを与えるものですからな」

「おいってば」

イルファが我慢しきれなくなったようにアシャの袖を引いた。

「本気か？」

「本気だよ」

「いやしかし、ユーノだぞ？ あいつだぞ、あの顔だぞ？ いくら装ったってたかが知れてる、楽しみどころかうんざりしねえか？ あ、それともやっぱり、男も嫌いじゃないとか、だからとりあえず手近のところで」

「イルファ」

最後のことばが妙な艶を帯びた気がして、慌てて否定する。

「そんなんじゃない」

「おお」

村長が唐突に嬉しそうな声を上げた。

「『女王』の装いが終わったようじゃな」

微かなきしみ音をたてて、ゆっくりと、これみよがしにゆっくりと境の扉が開かれる。くす、くすくす、と娘達のくすぐったそうな笑い声が零れ出し始める。

「ほおう」

「これはこれは」

開いた扉の向こうに仁王立ちになっているユーノの姿に、イルファと村長が意外そうに感嘆の声を上げた。

「さ、どうぞ」

一人の娘が手を取り、ユーノを誘導してこちらの部屋に引き入れてくる。同時に、周囲から戸惑ったような、どこか妖しい溜め息が漏れた。

細い足元は銀色のサンダルで包まれている。体をきちんと覆う麦色の長いドレスの上から、柔らかく煙るような淡いピンクの薄物が重ねられている。焦茶のぴんぴんとはねていた髪は櫛をいれられ、うなじを見せつけるように銀の髪飾りでまとめて結び上げられている。散らされた小花は乱れ落ちるのを防ぐためだろうが、絡み付きまわりつく髪が花を溢れさせているようにも見える。濃いめの紅をさした口元は片意地な表情をたたえてどこか不安定で、人の目を強く惹き付けて離さない。

その磁力に似た輝きは、少年の女装というには艶やかすぎて、かといって娘が美しく装ったというには、今にも全てが崩れそうな危うさに満ちて、見る者の胸を強く締め付ける、今この瞬間に手を伸ばさなくては、消えてしまう幻に出会っているのではないかと。

(ユーノ)

その想いはアシャとて例外ではなかった。

(髪が、長かったんだ)

ユーノの髪をまとめ上げている銀の髪飾りが掬っていった動きを思っ、くらりとしためまいを味わう。その髪飾りのかわりに、自分の指を這わせたかった、そんな気持ちに胸が疼く。

(まいった...)

これは。

(まずい)

暴走しそうな気持ちを抱えたのは、きっと自分一人ではないはず。

ふいに気づいて周囲の男を目で制しようとしたアシャの視界の端で、ユーノの紅の唇がふわりと開いた。

ごく、と唾を呑み込んだ男達に妙な緊張が走る。

だが。

「てめえらなあっっ！」

いきなり殺気立った怒鳴り声が響いて、揺れた気持ちにざぶりと冷や水がかかった。

「よくも人の都合もきかずに...っ！」

周囲の緊迫感もあっという間に解ける。

なんだ、やっぱりこういうことか、そうだよなあ、そんな、男が着替えると美少女でした、なんてなあ。

そんな失望感と苦笑があたりを満たしていくにつれ、アシャも冷静になった。

「ボクは女装はごめんだっっ！」

「まあ、そう怒るな」

やっぱりユーノだよなあ。

ほっとしたの半分、くすくす笑いながら立ち上がると、相手は見る見る真っ赤になった。

「よく似合うぞ、なかなかの『女王』様だ」

今度はわずかに青ざめる。今にも切れそうなほど怒っている、それがますますユーノらしくて安堵が広がる。

「入るな、とは止めたぞ？」

「くっそおおお！」

ユーノは眉を逆立てて悔しがった。

「もっと早くに教えろよっ！」

「仕方ないだろ、あ、それにな」

「何だよ！」

いつものユーノだ、けれど姿形はとびきりだ、他の男がどう思おうとも、今の俺には。

(最高の、獲物)

思わぬ楽しみに唇が綻ぶ。

「俺も麦祭に参加するからな」

今度は確実のユーノの顔から血の気が引いた。

「その顔を見ると、聞いたんだな、祭りの内容を？」

「聞いたよ、それで？ このうえまだ、ボクをからかおうって言うのか？」

「ま、そんなとこだ」

アシャはうきうきと頷いた。ドレス姿で喚いているユーノが可愛くて仕方がない。選ばれることはないだろう、だが公然と迫ることはできる、ただの遊びとして、けれど本心かけて真剣に。

(これは祭り、だからな)

真実ではない、仮面の役割、物語の中の出来事。拒まれることさえ、想定範囲。そんな逃げ口上を用意しなくては近づくことさえできなくなっている自分に改めて気づく。

浮き名を流したアシャ・ラズーンが聞いて呆れる。

「んじゃあ、俺もでしょう」

「は？」

いきなりイルファが能天気な声で言い出してぎよっとした。

「祭りだもんなあ、楽しまなきゃなあ」

ちらっとこちらを見られて苛立った。

(何を考えてんだ、こいつ。いや、ひよっとして)

ユーノの『女王』の姿を見て、イルファも意外に悪くない、などと思ったのか。

(まさか)

イルファは女性だけではなく冗談半分にアシャも口説くことを思い出して、なお複雑な気持ちになる。

(男としてユーノを好みだと感じた、とか)

それはそれで安全、でもないのか。

「イルファっ、てめえっ！」

「ぼくも出る！」

きりきりしたユーノの罵声に重ねるように、レスファートが大慌てで宣言した。

「ユーノのキスがもらえるんなら、ぼくも出る！」

「あ、あのねえ……」

さすがに理由が真っ当すぎて、ユーノが引き攣った顔で口ごもる。

「おお、盛り上がっておりますなあ……まあ、祭りですから、みなさんもどうぞ、楽しんでくださいませ」

「た、楽しめって……」

村長が上機嫌でまとめて、ユーノがぐったりと頭を垂れた。

「ユーノ、こちらを向いておくれ」

「その愛らしい唇を僕に捧げておくれ」

「かわいいユーノ」

「愛らしいユーノ」

「ユーノ、あなたの耳は、麦の調べをも聴き取れそうな美しさを持っている。あなたの髪は、そよ風になびいて明るい光を放ち...」

ほかの一つ覚えのようにひたすら褒め讃えるもの、何やら書きつけたものを持ってきて読み上げるもの、入れ代わり立ち代わりのひっきりなしの求愛にさすがにうんざりしてきたユーノだったが、そのうちの一人の声に顔を向けた。

「瞳の夜を私に出来ないか。かわりに私は眩い朝をお前にあげよう」

(ラオカーンの詩だ)

純白のラフレスの花を差し出していた若者は、自分一人が女王の目に止まると知って、ますます熱心にことばを続けた。

「ああ、青き空の不思議を教えてくれ、私は地の実りを返すから。緑の風の行く先へ走り去る白い少女よ、その素足に飾る白きラフレスよ」

しっかりした眉、まっすぐで誠実そうな眼差し、豊かな声には真摯な響きがある。

(レアナ姉さまがよく詩ってたっけ)

思わず、差し出されたラフレスを受け取った。相手が嬉しそうに顔をほころばせるのを、辛い思いで見返す。

(けれどこれもまた、幻の光景...)

視界が揺らぐ。

(あれは何て言ったっけ.....白き花よ、許されるなら.....だっけ)

ラフレスを渡してくれた相手がなおも先を続けようとしたとき、唐突に扉が開いた。入ってきた人物を見て、求婚者達が次々と決まり悪そうな顔で出て行く。

「それでは、ユーノ、また」

「ユーノ、次こそ、僕を選んで下さい」

「ユーノ、私の夜はあなたのものです」

最後に、例のラオカーンの詩を詠った男が、やはりラオカーンの別れの句を告げて立ち去った。

「何だ？」

次々と去って行く男達に、入って来たアシャがきよんとした顔でユーノを振り向く。

「全部振ったのか？」

「あなたに恐れをなしたんだろ、とても勝ち目がないって」

「ふうん？」

アシャは己の影響に気づいていないらしい。軽く首を傾げたが、最後の一人が出て行くと、思い出したようにラフレスをユーノに渡そうとし、手を止めた。

「もう、あるんだな」

「いいよ、もらっとく」

ふう、と溜め息をついて、ユーノはアシャの手から花を受け取った。瞬間、触れた指先にどきりとした胸の音をごまかすように、部屋の中を示して笑う。

「すごいだろ？」

「花屋が開けるな」

「ボクもそう思う」

少しためらったのは、花を手放したくなかったからだ。アシャから花を捧げられることなど、きつとこの先はない。

けれど。

(これもきつと、幻で)

思い切って、アシャのラフレスを他の花と同様、テーブルの上に置く。

「ラオカーンの詩を知っているのがいたな」

アシャはちらっとテーブルの上のもう一本のラフレスに目をやり、続いて扉を振り向いた。

「ああ、カズン、とか言う人だよ。二、三年、旅をしたことがあるんだって」

「そうか」

アシャは顔を戻した。しらっとした顔で、それ以上口説き文句を続けるつもりもなく、

「国によっては、ラオカーンで一日が明け、一日が終わるところがあるからな」

アシャは祭りに参加はしているが、ユーノに求愛しなくてはならない義理はない。

(ちえっ)

切なくなった自分の気持ちに目を閉じ、話題を変える。

「レアナ姉さまがよく歌ってた。アシャ、何か好きなの、ある？」

「そうだな...」

アシャは無造作に長椅子の隣に腰を降ろした。

村一番の上等な布張り椅子だということだが、かなりの年代物で二人が座るときしんだ音をたてる。そっと距離を置こうにもへたに体を端に寄せると脚が危うそうだ。

「俺としては...」

アシャは何か考え込むような目でちらりとユーノを見た。

今日のユーノはドレスに白い薄物とレース、髪飾りは麦と花とりボンで組み合わされた花冠だ。初めて装ったものより素朴に見えるだろうが、ユーノはこちらの方が好きだ。

(でもアシャはどう思う?)

「『宵の女神に』が気に入ってるかな」

ラオカーンには恋の詩が多い。たとえ、ユーノに向けてではなくても、アシャの声でラオカーンが聞ける。

僅かな期待に胸が躍る。

「どんなの、だっけ？」

「ああ、こんなのだ」

有名なやつだから、知ってるんじゃないか。

さりげなく視線を逸らせたアシャが、息を改めた。

「白き花よ

許されるなら、その花卉に口づけん」

びく、と思わず体が強張った。

アシャは気づいていないらしく、声に集中して続きを詩う。

「夜闇は葉ずれとともに打ち寄せ

今、彼の女性(ひと)の白き手に...」

優しい響き、甘い声色。

(まいった、な)

苦笑する視界が滲む。

(好きなものも、同じなのか)

離れていても呼び合う魂とはこういうものか。側に居なくても、願いを重ね合う恋人達の絆を見せつけられて、胸が切なくて苦しい。

(いつまでたっても、届かない、気持ち...)

歪みそうになる顔を平静に保とうとして、堪え切れずに唇を噛み、瞼を伏せる。

(いつまでたっても、届くわけがない、気持ち...)

わかっていたことではないのか、そんなことはとっくの昔に。

ユーノの脳裏を、初めての夜会の記憶が流れて行く。

十歳の時、だった。

近くの王子達が訪ねて来て、セレドの三人の姫にと、三着のドレスを贈り物とした。

セレディス皇はおおいに喜び、幸いに王子達も三人兄弟ということで、彼らを夜会に迎え、三人の娘にもてなさせることとした。

贈られたドレスは純白、ラフレスの細工の花飾りが添えられ、胸元には青の宝石、レースとフリルは金糸銀糸で手の込んだ縫い取りと飾り刺繍をされた豪華な美しいものだった。はしゃいだ娘達はドレスを身に着け、それぞれ得意満面で鏡の前に立ったのだが.....一人だけ、ユーノは不安に立ち竦んだ。

どこか、似合わない。

侍女も『それ』に気がついた。

あれやこれやと他の二人より手をかけた。髪を特別に整えた。宝石も多めに飾りつけた。唇に紅を濃いめにさし、ラスレスの生花も添えた。それでようやく、少しは見栄えがよくなったと思われたのだろう、レアナとセアラとともに広間に送り出された。

皇女達が広間に現れると、人々はわあっと華やかな歓声を上げて迎えてくれた。王子達も目を輝か

せて笑い崩れる。

(喜んでくれてる)

ユーノはほっとした。少し緊張がほぐれて、無造作に髪をとき流したレアナ、おしゃまに結び上げたセアラを見た。二人と同じぐらい、自分も美しく見えているのだと思うと、喜びはさらに跳ね上がった。

夜会は滞りなく進んで、やがてダンスが始まった。

セレディス皇の合図で王子達が歩み寄ってくる。一番上の王子が頬を赤らめながらレアナに申し込む。一番下の王子がにこにこことセアラを誘って中央へ出て行く。

(次は私なんだ)

胸をどきどきさせて待つユーノの耳に、広間の賑やかな嬌声を縫って、唐突に一つの眩きが届いた。

「損だな」

(え?)

思わず目を見張って中の王子を見ると、相手はうらやましそうにレアナを、そしてセアラと踊る弟の姿を眺めている。気づけば、客達の視線はただの一つも、次に申し込まれるだろうユーノには向けられていない。

ぼそりと続いたことばが聞こえているとは思っていないのだろう、それほど小さな眩きのつもりなのだろう。だが。

「真ん中にはいつも残り物が来るんだよな...」

(のこり、もの...)

顔が熱くなって身が竦んだ。

(私は...)

不安になって父母を振り返ると、中の王子がユーノと踊るのをひたすら無邪気に待っているように、微笑んでこちらを見やってくるセレディス皇とミアナの姿が見えた。その視線にうろたえて、再び中の王子を見ると、相手は複雑な表情でちらりとユーノを見て、そそくさと目を逸らせ、忌々しように舌打ちをするのが聞こえた。

(困って.....るんだ)

胸の中で、理解が弾けた。

(私と踊りたくなくて.....困ってるんだ)

客達が歓声を上げて迎えたのは、ましてや、王子達が目を輝かせて待ったのは。

(私じゃ、なかった?)

すう、っと血の気が引いた。

(そう、か)

俯いた。

視界の端で髪に飾ったラフレスの花卉が揺れて、滲んだ。

(そう...か.....)

唇をそっと、やがて、きつく嚙む。

(そう...なんだ...)

それからふいに顔を上げ、これみよがしににやりと笑って、身を翻した。後ろに控えていたサルトの手を掴んで誘う。

「踊ろう、サルト！」

(ごめんよ)

「で、でも、ユーナ様！」

「いいから！」

(ごめんよ、サルト)

戸惑いたじろぐサルトを無理矢理引っ張り出す。

客がざわめいた。ミアナが不快そうに眉を寄せ、セレディスがむっつりと顔をしかめる。

そして、その中で、なぜかはっきりと聞こえた中の王子の深く大きな吐息、背中を向けた瞬間の安堵の表情。

(き・か・ぎ・った・の・に・な)

サルトが困った様子で振り回されているのに笑い、ことさらはしゃぎながら、胸の中でことばを一つ一つ放り投げた。

(姉さまより・セアラより・時間・かけて・もらったのに・な)

昔話がある。

森一番の醜い鳥がきれいになりたいばかりに、落ちていた羽根や葉っぱや網のように編まれた虫の巣を集めて自分を飾りつけるのだ。けれど、見かけた鳥の仲間から羽根を奪われ、風の精に葉っぱを吹き飛ばされ、銀糸のような虫の巣網も逃げ惑うときに自分で破いてしまう。傷を負い、痛みに泣きながら、ぼろぼろになって自分の寝所に帰って行く鳥の、虚栄心を嘲笑う話なのだ。

(けれど、醜い鳥だって、ちょっとだけ、きれいになってみたかっただけだろうに)

あの話の残酷さは、きっとレアナ達にはわからない。

娘達を健やかに育てようと、ミアナがその話を繰り返すたび、ユーノは辛くてたまらなかった。

ぼろぼろになって拾い集めた銀糸の巣網を引きずるあの鳥と、必死に着飾って、それでも王子に拒まれる自分のどこにどんな差があろう。

「ユーナ様、どうかなさったのですか」

「なんでもない、なんでもないよ、サルト、いつもの悪ふざけだ、だから」

もっとみんなを驚かせよう。

ことさらにっこり笑って、ユーノはサルトを振り回した。

夜会が終わって、もちろん、ユーノは、せっかくの会で客人である王子に礼を失したと、ひどく父母に怒られた。皇族としてあるまじき振舞いだと。

けれど、誰もユーノの無礼の理由は聞かなかった。

ただ、ユーノは『変わっている』のだ、ということになった。

それから、ユーノは夜会に出なくなった。

大抵は、皇宮の庭でカザドを見張りながら、木の枝の上やレノの背で、華やかに盛り上がる夜会を眺めていた。

レアナが舞う。セアラが笑う。明かりとざわめきが眩くて、何度も目を逸らしたけれど、いつの間にか、じっと見つめてしまう。

今でもはっきり覚えている。

夜会の座では、レアナが必ずセレディス皇に促されて、ラオカーンの詩を歌うのだ。

「白き花よ

許されるなら、その花卉に口づけん……」

伸びやかな澄んだ声が広間を見だし、人々をうっとり微笑ませるのを、ユーノは暗闇から何度も一人で見してきた。

(許されるなら、か)

記憶の中のレアナの姿に魅入りながら、今も思う。

(あの時、泣き出していたなら、私は夜会に出られていたのかな、皇女の一人として)

そう、ひどい扱いだと泣き出していたなら。

父母は心配し、ユーノは慰められ、そして、あの、中の王子こそ礼儀知らずとして叱責されていたのだろう。

(それは、辛いよ、なあ...)

他国の宮殿で、自国では王子とあがめられている者がののしられるのは。

それに、中の王子が踊れなかったのは、彼の失礼というよりは、見劣りする容姿で生まれてしまった自分のせいだ、きっと。

(だって、サルト以外、聞かなかった)

どうしてあんなことをしたのか、と。何があったのだと。

どこかで皆、思っていたからではないのか。三人並んだ時、飾りつけてはいるが美しさにほど遠いユーノを眺め、中の王子の気の進まぬ様子にどこか同情し共感した、あの皇女と踊らなくてはならないのか、気の毒なことだ、と。

だからこそ、あの後誰も彼を咎めなかった、彼の兄弟でさえも。

あれほどたくさんの人の中で感じた、疎むような思いは、誰もユーノを守ってはくれないのだという理解。

(飾りを剥ぎとられて、泣いている、鳥)

それでも。

ソレデモ、ユメハ、ミラレルカモト。

願って。

願った、だけだ、けど。

(きっと、それが間違いだったんだ)

きっと、女に生まれたことさえ、きっと。
(許されるなら)
少女でいい、と許されるなら。
誰かに助けを求めていい、と許されるなら。
(求められるのは、いつもいつも、私、ではない)
すっかり慣れているはずのつもりだったのに。
(ばか...だなあ.....)
アシャのことになると、まだ胸が切なく揺れてしまう。
「.....そして
柔らかき褥(しとね)へと誘う
許されるなら、その眠りに
とこしえの愛を誓いて
その心を得んとする
愚かなるかな
恋する我は.....」
アシャの声は甘やかせるように優しい。
その声にただ浸るだけ、それで満足するしかないのだろう、ユーノには。
(破れて引きずる、銀糸、いや金色の網...)
強く握ったら粉々になって消える、儚く美しい夢の網。
それほど保つわけがないとわかりながら、それでも必死に手を添え、支え、転がっても怪我をして
も手放さず、胸に守り抱えて持ち帰り、ほっとして微笑んで手を開けばそこには何もなくて。
(振り返って見送る、やすやすと、当然のように波打たせて攫っていく、白い手の持ち主)
ああ、そうなんだ。
あれは、私のものでは、なかったんだ.....。
納得と、理解と。
空っぽの傷だらけの両手をぶら下げて。
きっとまた、苦笑いする、自分の愚かさに。
(何度繰り返せば...気が済むんだ、と)
「ユーノ？」
「なっ、なにっ」
ぼんやりとしたのを、ふいに顎を掴まれて押し上げられ、ぎよっとする。深くたゆとうような紫
の目が覗き込んでいて、どぎまぎした。
「目が潤んでる」
「っ」
指摘されて顔を背けかけたが、アシャはそれを許さなかった。
「どうした？」
ラオカーンの詩を歌ったのと同じ柔らかな声で問われて、瞬間、心が崩れそうになるのを、必死に
振り切った。
「な、なんでもない、気のせいだろ？」
急いでアシャの手を払い、顔を振った。滲みかけた涙を飲み下す。
「それより、アシャ」
「うん？」
訝しげなアシャを、逆に真正面から見据えて、
「麦祭に参加したの、何か理由があるんだろ？」
「どうしてだ」
「イルファが、神殿の肝試しの話が出たとたん、アシャの態度が変わったって言ってたけど」
「へえ、わかったのか」
ひよい、と片方の眉を上げてみせた。
アシャの気持ちがそちらへ流れたのにほっとしたの半分、がっかりしたの半分で、
「じゃあ、やっぱり何かあるんだ」
「実はあの神殿のある場所に宙道(シノイ)の出入り口があるんだ」
「出入り口？」

ユーノは首を傾げた。宙道（シノイ）自体が今一つ掴めていないのだから、出入り口と言われても想像がつかない。

「神殿を建てるぐらいだから、あそこは聖地化してるんだろう。とすると、そうそうあっさり出入り出来なくなってるんだろう」

「ああ、それで」

ようやく得心がいった。

「祭りの最終日の肝試しをうまく利用しようというわけか」

「まあ、そういうことだ」

アシャはにやりと笑った。

（何だ、やっぱり、他の理由、なのか）

つい、そう思ってユーノは苦笑した。期待なんて何度も裏切られて捨てているのに、忘れたところに蘇ってくる。

それでなくても、このアシャという男は、己の影響力がわかっていないところがある。

（ほんと、無神経なやつだ）

まるで、ユーノの心のぼやきを聞いたように、アシャがぬけぬけとした口調で尋ねてきた。

「ところで、俺への返事は？」

（ほら、な）

ユーノは胸の中で吐息をついた。

「返事って何だよ」

「ラオカーンの『宵の女神に』は求愛の詩なんだぞ」

「あ、そうなの」

さりげなく応えながら、正直なもので心臓の鼓動が跳ね上がる。

（違う違う、これは遊び、祭りの間のお芝居だ）

ユーノは自分に言い聞かせた。

（お芝居にはお芝居で、だよ）

「だーめ」

にっこり白々しく笑って応える。

「回答は祭りの最終日までなし」

「そいつはひどい。焦がれ死にしたら、どうしてくれる？」

アシャがわずかに目を細めて、唇をとがらせて見せる。わかっているのかいないのか、子どもっぽい表情にどきりとするような艶がある。

「死ねば」

突き放した。

「おいおい...」

アシャがひくっと引き攣る。

「それとも何かい、レスファートに張り合う気なのか？」

「レス、ね。なるほど、強敵だな。うん、じゃあ、レスに譲ろう、今回は」

（人の気も知らないで）

さすがにむっとした。

「アシャってさ」

「うん？」

「それで一体、何人くどいてる？」

「何人って」

「あ、男性も含めて、でいいけど？」

「ユーノッ！」

くしゃりと響められたアシャの顔に、少しだけ気が晴れた。

数日間は瞬く間に過ぎた。

今日は祭りの最終日、いよいよ作戦決行の日だ。

アシャは与えられた一室で手入れをすませた剣を鞘におさめながら、ゆっくり周囲を見回した。

イルファは、またどこかの家の馳走にあずかっているのか、姿がない。ベッドではレスファートが、丸くなって眠っている。

馬や荷物は神殿近くの林に隠してある。

後は宙道（シノイ）の出入り口を見つけて開放すればいいだけだ。

（四人...か）

アシャは眉を寄せた。

それほど多くの人間を一度に宙道（シノイ）に連れ込むのは初めてだ。

（もってくれればいいが）

確かに宙道（シノイ）には『運命（リマイン）』も『運命（リマイン）』支配下（ロダ）の人間も、おいそれとは踏み込めない。だが、別の厄介な人間を引き込む可能性は十分にあった。ラズーンへの反逆者、視察官（オベ）の裏切り者、ギヌア・ラズーンだ。彼なら、アシャの開放した宙道（シノイ）を辿れないことはないだろう。

もし万が一、宙道（シノイ）を進む最中にギヌアの攻撃を受けでもしたら、さすがのアシャでも生き抜くのが難しくなる。

だからといって、宙道（シノイ）を使うのを止めようとは全く思わない。

（ユーノに、これ以上傷を負わせたくない）

ただでさえ無鉄砲で、引き止めても引き止めても、危険の中へ自分から飛び込んでいってしまう娘なのだ。なまじ強くて優しいから、仲間を守るためならと繰り返し死地へ向かってしまう。傷を受けても悲鳴も上げない助けも求めない。一人で耐えるか、そのまま逝ってしまいたがる。

（今まで生きてこれた方が不思議だな、いくらレアナ達を守るためとは言え）

溜め息をつく。

アシャと会うまで、ユーノがどれほど危うい夜を過ごしただろうと思うだけで、今のアシャは背筋が凍りつく。

（たった十七の娘が、こんなものに縛られて）

胸のセレドの紋章ペンダントに触れた。美しく穏やかなレアナ、しとやかで従順なミアナ皇妃、温和で陽気なセレディス皇、おしゃまで愛らしいセアラ。

確かに誰も愛すべき人々、だが、その家族を守ろうとするために、ユーノは一人で死線を彷徨い続けてきた。本来なら、幸せな恋と優しい家族、華やかな夜会と貴族達の賞讃という、少女の望みうるもっとも美しいものを手に入れられる立場にあったはずなのに。

ユーノは自分の『銀の王族』という運命に背を向けてまで、戦いの暗闇へと踏み出していく。

（.....ある意味では）

誰よりも『銀の王族』にふさわしいのかもしれない。

（人の哀しみを見ごぞせず、自分の傷みを振り切って人を守ろうとする）

『銀の王族』の命は、まさにそのためにこそ準備されているのだから。

セレドのような平和な国、幻の人の世界を保つ願いのためだけに。

「.....」

思わず零した吐息の幼さに気づき、アシャは苦笑いした。

（まだ、惹かれていく）

ユーノの激しい優しさに。

（とめようもなく、限りなく）

目を伏せる。絞られていく胸が切なくて痛い。

（それに、ときどき、あんな瞳をする）

ラオカーンの詩を聞きながら、ユーノはどこか寂しげな頼りない色を瞳に滲ませていた。

決して手に入らぬものを強く想うような、なのに、そういう自分を嘲るような感情の波。

（何を望んで.....何を諦めようとしている？）

アシャを見返した黒い瞳が、ほんの一瞬泣きそうな、すがるような色をたたえて潤んでいたように見えた。こちらの胸を締めつけて、ついつい理由を尋ねさせるようなその顔、なのに、やはり一瞬後には、目の錯覚だったかのように消えてしまった表情だった。

（何が足りない）

剣の腕や豊かな知識や美貌や才能ではないのは確かだ、それらをどれほど見せてもユーノは揺らぎもしない。

（俺の何が、ユーノの望みを満たさない？）

「.....だから...求めてくれないのか.....?.....」

溜め息を重ねて首を振り、ベッドでくうくうと気持ちよさそうに眠っているレスファートをそっと揺り起こす。

ユーノをうまく連れ出せるかどうかは、レスファートの腕にかかっている。

「レス」

「う...ん」

「レス、起きろ」

「んー」

「アグナイを出すぞ」

「ん！」

がばりとレスファートは跳ね起きた。アクアマリンの目を見張ってアシャを見つめる。乱れてくしゃくしゃになったプラチナブロンドは、レスファートが数回頭を振ると、すぐにさらさらと乱れを解いて肩に滑り落ちる。

「手順はわかっているな？」

「うん！ わかっている。『へま』はしないよ」

イルファあたりから聞き覚えたのか、生意気な口調で言いながら、レスファートは目をこすってベッドから降りた。

「荷物はもう向こうに用意してあるから」

「うん。きっとユーノをつれてくよ」

「頼んだぞ」

頷いて部屋から外へ走り出していくレスファートを見送り、アシャは部屋の中を改めて見直した。忘れ物はなさそうだ。

袋から伝言を書いた布を取り出し、テーブル中央の灯皿の下に挟む。

『急ぐ旅、追手を引き連れている旅です。失礼とは思いましたが、麦祭を使わせて頂きました、申し訳ありません。このお礼はいつか必ずいたします。ラズーンのもとに。アシャ』

見る者が見れば、最後の名前の価値を見抜くだろう。そして、それは、この村にとってよい見返りをもたらすはずだ。

灯はそのままに、そっと家を出る。

「さて、イルファの奴を探してくるか」

つぶやいて、アシャは闇の中へ姿を消した。

闇が深くなるにつれ、求婚者達の姿はまばらになっていた。

それぞれの手には、青い染料で染めた小さな油の壺がある。その油を、神殿の一番奥まったところにある、神像の祭壇上に置かれた自分の灯皿に注ぎ、火を灯してくるのが今回の取り決めだ。

求婚者達は、時間を前後してユーノのいる村の酒場を出発し、星だけは呆れるほど出ている月のない夜の中を、神殿目指して黙々と歩いている。

唐突に間近に動いた気配に、アシャはちら、と目を向けた。

「よう」

イルファがぬっと姿を現す。

「手順は忘れなかったみたいだな？」

「あたぼうよ。俺がお前と組む作戦の手順を忘れたことが、今まで一度でもあったか？」

「なかったな」

にやりと笑うと、同じように不敵な笑みを返して、イルファは油の壺をアシャから受け取り、再びすすると闇の中に消えていく。イルファの役目は、いち早く神殿に辿りついて、神殿の灯皿にアシャと自分の灯をともし、他の者が妙な興味をアシャに向けないように見張ることだ。

イルファを見送ったアシャは唇を結び、小さな村にしては凝った造りの神殿を見上げた。

星空を背景に、建物の輪郭が黒々と夜闇に溶け入っている。

そっと手を伸ばして入り口を探る。昼間見たときの印象、地上から続く数段の階段、細かな彫りの柱、恐らくはレストニア式の神殿だろう。

(とすると)

アシャはゆっくりと神殿の中へ足を踏み入れた。

闇の中には既に幾つかの足音がひたひたと響いている。村人とはいえ、神殿内部を熟知している者は少ないだろうから、アシャの方が早く正確に目的の場所へ行けるはずだ。

(やっぱり、この奥が神像の安置場所だな)

夜の空気を透かして方向を見定める。

柱の向こうでチラチラと灯が動いている。

もう、気の早い、度胸のいいのが、灯皿に火を入れたらしい。

(…よし)

その光も目安に、別の方向に足を速める。柱と柱の間を静かな足取りで通り抜けていく。空気は重く沈んでいる。その湿った空気の粒子一つさえ乱すことを恐れるような密やかさ、他から見れば、その動きは、夜の河の中を泳ぎ渡っていく巨大な魚のように見えたかもしれない。

(このあたりか)

見極めて、やがてアシャは立ち止まった。目を閉じ、位置を確かめるように前後に一歩ずつ動いてみて、もう一度確認し、元の位置に戻る。

「…」

微かな緊張が満ちた。外から見れば、自分の目が淡いきらめきに覆われていくように見えるだろう。だが、視界は澄んで透明だ。空気の流れさえ見えそうな気がする。

抜き放った短剣が黄金のオーラを放ち始める。金粉をまぶしたような輝きが、次第次第に剣全体にまとわりつき、密度を上げて濃くなっていく。僅かに震えているのは、あまりの高エネルギーを物体一つに凝縮させているため、暴走させずに力を縛り上げる、そのコントロールが全てだ。

十分に光が満ち渡った剣を、ゆっくりと掲げた。目の前の空間を切り取るように、中空に円弧を描く。

金の軌跡がきらきらと光り輝きながら空に漂って残る。視界を焼かれたせいではない、ただの光ではない、何かの力の実体が、その空間を円として切り取ったのだ。

その証拠に、辺りの神殿の柱や壁に反射して、すぐに闇に吞まれていくかに見えた軌跡は、消えることなく一時ごとに輝きを増し始める。同時に、その軌跡に囲まれた内側の空間から光が奪われたように、円の中央部からどす黒く、何かが濁り始める。

に、と唇を綻ばせたアシャの額から、汗が一筋、頬から首筋へと流れ落ちる。

「、っ」

体から一気に放出されるような無音の圧力が空間に加わった。

押し、歪める。

抵抗する、円弧の空間。

だがしかし。

「！」

突然、限界が来たように、ぼこりと円の内側の空間が『凹んだ』。見る間にその闇の奥へと崩れ去るように落ち込んでいき、暗い彼方へ続く道の入り口が変わる。

(レス！)

緊張を保ったまま、アシャは呼びかけた。久々に開いたせいか、それとも二百年祭の不安定さか、宙道(シノイ)の安定が悪い。

(来てくれ！)

レスファートがいなければ、この試みも成功しなかったかもしれない。

「！」

「レス？」

今夜はユーノの側に居るね、とにこにこしてやってきたレスファートが、ふいに顔を戸口の方へ振り向けて、ユーノははっとした。

「アシャだね？」

「ん」

小さな声で囁き返すレスファートは隣室へと視線を走らせる。

「来いって言ってる」

「わかった、行こう」

「うん」

ユーノは椅子から立ち上がり、レスファートを従えて、仕切りの扉を開いた。

「ん、なんじゃね？」

たった一人、テーブルについていた村長が、突然出て来たユーノとレスファートを不審そうに見やる。

「あ、あの、ちょっと、小用を」

ぼそぼそと応じると、村長は鷹揚に頷いてみせた。

「おお、いつてきなされ」

「いや、ボクじゃないんです、レスが」

「おしっこ！」

レスファートが軽く地団駄を踏んでみせた。

「ほう？ 一人では怖いのかね？」

からかうような疑うような声に、レスファートが泣き出しそうに顔を歪める。

「だって、今日はみんな、きもだめしとかしてるんでしょ？ こわいものがあるんだよね？ ぼく、一人でいけないよお」

「それはそれは」

村長は慌てたように咳を立て、扉を開いてくれた。レスが小走りに飛び出して、外からユーノを呼ぶ。

「早く、ユーノ！」

「わかったよ！ すみません！」

「はいはい」

(ごめんなさい、村長)

ユーノ達が戻ってくることを疑いもせずに送り出してくれる村長に、心の中で頭を下げ、ユーノはレスファートに追いついた。

「こっちだよ、ユーノ、あ、まって」

レスファートが引き止めた。

向こうから一人の青年が駆けてくる。早々に神殿の肝試しを終わらせたのか、どうやらカズンのようだ。

急いで物陰に身を潜めてやり過ごそうとしたユーノは、一瞬ためらった。

たとえ、通りすがりの旅人とはいえ、ユーノには女王たる役目がある。誰か一人を求婚者達の仲から選ばなくては、祭りは終わらないだろう。

親切だった村長や村人の顔がユーノの脳裏に浮かんだ。

(ええい、ままよ！)

震えかけた唇を引き締めて、カズンの前に飛び出した。

「カズン！」

「は？ あ、これは、ユーノ？ こんなところにどうして...」

「あなたを選びます、カズン、後、よろしく！」

言うや否や、体を寄せて伸び上がり、カズンの頬に素早いキスを与える。

「え、あ...」

ぎょっとした顔でカズンが体を引く。同時に身につけていた上着の薄物を脱いで手渡し、ユーノは口早に続けた。

「ラズーンのもとに。最後までいられなくて、ごめんね！」

「あっ、あなた、ひょっとして、ユーノ！」

カズンのことばの残りは聞こえなかった。レスファートと共に走り出したユーノ、あまりのことに呆気にとられてしまったのか、カズンは追ってこない。

神殿に着くまでに二人ほどやり過ごし、ユーノとレスファートは何とか、神殿入り口近くに巨体を器用に縮こまらせていたイルファと落ち合った。

「はい、ユーノ」

「ん」

アシャの配慮か、イルファに渡された旅の服に、闇に紛れて手早く着替える。脱いだドレスをどうしようかとためらったが、唇を押し当てて感謝し、近くの柱のもとにまとめておいた。

「こっち、こっちだよ」

レスファートは明かりのほとんどない神殿の中を飛ぶように走っていった。引き連れていく馬達の蹄が、石の床に固い音をたて続ける。イルファはそれより重く響く派手な足音でレスファートを追っていく。

「まって！」

レスファートが再び警告を発した。

急いで柱の影に身を潜めたユーノ達の前を、かなり出遅れた求婚者の一人が、首を傾げ傾げ歩いて行く。

「おかしいな、確かに物音がしたんだが」

その声に聞き覚えがあった。ユーノの唇がどうのこうのと言った男だ。

(もうきっと、あんな求婚を受けることはないだろうな)

苦笑したユーノは胸の痛みを押し殺した。

(きっと、どんな形でも、この先、私を望むものなんてない)

走り出したレスファートの後を追始める。

神像の前の灯がちらつき、無数の影を踊らせている。柱の間を縫って進むイルファやユーノの体にも、影はゆらゆらと揺らめいている。

「もう少しだよ……あ、あそこ」

レスファートが前方の暗闇を指差した。

神像の灯から離れているがゆえの闇、それなのに、そこはきらきらとした金の輪が光りながら空中に浮かび上がっている。そして、その側に、怪しく揺れる神像の灯と黄金の輪の不思議な光に照らされて、彫像のようにすらりと立っているアシャの姿があった。

「おう、よくやったぜ、レス」

イルファがいそいそとアシャの側に駆け寄る。振り返ったアシャは珍しく、緊張したような幼い笑みを返してきた。

「ご苦労だったな、レス」

「うん！」

少年が褒められて誇らしそうに笑う。と、イルファが駆け寄った後ろから、何か白いものがひらりと落ちた。

「これ、何、イルファ？」

ユーノは拾い上げて眉をしかめた。

「俺は知らんぞ」

「文字が書いてある……えーと」

ユーノは神像の近くまで戻って布を広げ、揺らめく灯で表面に書かれたことばを読んだ。

『お急ぎの旅に麦祭を良きものとしてくださいました。何か、この村に必要とされるものがあるのではと見ておりました。ささやかながら、女王のお礼に旅のものを揃えておきました。ラズーンのもとに、よい旅を。 村長』

「知ってたの？」

レスファートが声を上げる。

「みたいだね。しっかりばれてるよ、アシャ」

「そりゃ、まあ」

アシャが苦笑いしてイルファを見る。

「こいつなんか、露骨に今夜だけを待ってたからな」

それから、ふと何かを思い出したように妙な表情になった。

「そう言えば、女王の役目はどうした？」

「選んだよ、ちゃんと」

「え」

相手がぎよつとした顔になるのに、思わず口ごもった。

「カズンだよ。来る途中に出くわしたから。みんな、良くしてくれたし、役目も果たさないで消えるのはあんまりだと思ったし」

もごもごと弁解じみた口調になるユーノと対照的に、明るく楽しく、レスファートがぶちまける。

「ユーノ、ちゃんとキスもしたんだよ！ でも、ぼくにはいつでもくれるって言ったから、いいの！」

「レスっ！」

慌てて制するユーノに、アシャはますます何か言いたげな奇妙な顔になった。

「そ、うか」

口を開く寸前に話の中身を変えたような、心の何かが抜け出してしまったようなあやふやな口調で眩いたアシャだったが、ユーノの不審そうな顔に気づいたのか、どこかひきつったように笑った。

「あ、それなら、いいんだ」

「？」

「いや…ああ、これが宙道（シノイ）だ」

唐突に話題を変えて、金の輪の中を顎で指し示す。

「へええ、これがなあ」

イルファがおそろおそろ近づいて、ぱっくりと口を開けている怪物に触れるように、おっかなびっくり、爪先で宙道（シノイ）の中をとんとん、と踏んでみる。

「どうやら底は抜けないみたいだな」

「大丈夫だ」

くすりといたずらっぽく笑って、アシャはことばを継いだ。

「これを抜ければ、ラズーンだ」

(ラズーン)

そのことばが胸を吹き抜け、ユーノは思わず体を強張らせた。

ラズーン。

全ての謎を含んだ国、ラズーン。

アシャが生まれ、性を持たぬ神々が住むという都、ラズーン。

統合府、ラズーン。

(ついに、来たんだ)

「そうかあ.....長かったよなあ」

イルファが満足そうに深々と溜め息をついた。

「じゃあ、行こうか」

一歩、まずアシャが宙道(シノイ)の中に入る。

その姿は、まるで何もない真っ黒な空間に不安定に浮いているようにさえ見える。

人の不安が伝わったのか、馬が尻込みして進まなくなった。

「おら、来いよ」

イルファが力づくで引っ張ったが、言うことを聞かない。

「ヒスト、おいで」

ユーノの促しに、ようやくヒストが一歩踏み出した。先に立って宙道(シノイ)に入り込むユーノに全幅の信頼を置いているのか、一歩、また一歩と暗闇の中を歩き始める。

「来いってば」

「まってよ」

イルファが苛立つのに、レスファートが声をかけた。残された二頭の間立ち、その両方の首にそつと掌を当てる。

「だいじょうぶだよ」

低く優しく、穏やかな声で、馬に語りかける。

どこか遠い目をしているのは、語りかけつつ、安心出来る心象を馬達に伝えようとしているからなのだろう。

「ユーノがいるんだもの、だいじょうぶ」

「何で、俺じゃないんだ？」

「黙ってろ、イルファ」

混ぜっ返したイルファを、アシャが制した。

渋々と、やがて素直に、レスファートに導かれて、馬達が宙道(シノイ)の中へ歩き出す。それを確認したアシャが、鋭い目配せをユーノに送ってきた。

「...? あ」

そうか。

その意味を悟ってはっとした。すぐに頷き、レスファートを覗き込み、話しかける。

「ほら、レス」

「え？」

「誰がボクの役に立ててないって？」

「え...？」

きょんとした顔で瞬きして自分を見上げるレスファートに笑いかける。

「レスがいなきゃ、ボクらはここから進めなかったよ？」

「う...ん。.....そうか.....そうなんだね」

頬を染め、眩そうな目をしてユーノを見返したレスファートは嬉しそうに頷いた。両手を差し伸べ、ユーノにしがみつく。ねだられるままに、レスファートを抱き締め、その頬に唇を当てて頬ずりした。

「...ユーノ...だいすき」

うっとりとおぼろげなレスファートにくすぐったくなる。

「ボクも、レスが大好きだよ」

「いっぱい？」

「いっぱい」

楽しそうな笑い声を上げたレスファートが、眠そうなあくびをする。

「眠いの？」

「うん」

「イルファ」

「ああ、わかったわかった」

イルファがひよいとレスファートをおぶった。

「結局俺は子守り籠ってわけだ」

「ぼやかない、ぼやかない」

くすくす笑って、ぱん、とその太い腕を叩く。

「行くぞ」

微笑んだアシャが先に立って歩き出す。

しばらくして、イルファの背中から安らかな寝息が聞こえてくると、ユーノは歩みを速めて、アシャの隣にゆっくり並んだ。

「アシャ？」

「ん？」

「わざと馬が怯えるのを放っておいたろ」

希代の軍師は答えない。

「あなたなら、馬を怯えさせずに宙道（シノイ）へ連れ出す方法ぐらい、知っているよね？」

「レスの不安を取り除くにはちょうどよかったな」

アシャは穏やかに笑ってみせた。

「実際、この先は...レスの力も必要になってくるだろう」

「そうだね」

ユーノも微笑み返す。そんなことになってほしくはないけど、レスファートが自信を持ってくれるなら、それでもいいのかもしれない、と思う。

宙道（シノイ）はどこへとも知れぬ闇の中を伸びている。足元は固かったが、光のない夜の湖を渡っていくようで、進むためには、体にも心にも強さがあるような気がする。

（私達の旅みたいだ）

どこへ続くと知れない運命に従って、あるいは迫り来る運命に追われて、人は皆、夜の道を歩いている。

「ユーノ、もし」

黙って歩き続けていたアシャが、ふいにつぶやいた。

「え？」

アシャを振り仰ぐと、相手はまっすぐ遠くを見つめて、ことばをためらっている。

「もし、俺が、お前を求め...」

「うおっ！」

背後のイルファが突然大声を出した。慌てて振り向く。

「どうした？」

「いや、足元がちょっと崩れた気が」

「...大丈夫だ」

ひんやりとアシャが唸った。

「物理的に崩れるもんじゃない」

「ぶつり...？」

「.....お前が五百人居ても崩れん」

「なら、安心だな！」

わはは、と笑うイルファの顔が少しひきつっているのを見ると、さすがの猛者もいささか不安と見える。

「意外に神経質だね、イルファ」

「意外とはなんだ。俺はキャサランの金細工のように繊細な男なんだぞ」

「.....」

「黙るな」

「いや、だって、ねえ、アシャ？」

くすくす笑って見上げたアシャは、奇妙な顔でユーノを見下ろしている。

そう言えば、話の途中だった、と思い出して、
「ごめん。それで？ もし、アシャが私を？」
「.....これからも大事にしていこうと思う」
だから、あまり無茶をしないでくれよ、主殿。
いきなり訥々と続けたアシャがすぐに前を見て、ずきりとした。
(何か、大事な話をしようとしたのかな)
もうすぐラズーンだから、それまでにわかっておかなくてはならない事とか、準備してはならない事とか。
(整えなくてはならない身なり...とか?)
思わず自分を見回す。
「...」
ただでさえ見栄えがしない体が、旅でもっと汚れ傷ついている。そういう主の風体では困る、そういう話だったのかもしれない。
胸が詰まった。
アシャの付き人としての仕事はラズーンまでだ。ラズーンに着けば、アシャと離れる。ユーノはセレド皇代行として、ラズーンへの恭順を示した後、再びアシャを伴ってセレドに戻りたいと願うつもりではあるけれど、アシャはそんなつもりはさらさらないのかもしれない。
後少しのことだから、付き人の自分にこれ以上の負担や迷惑をかけないように大人しくしておいてくれ。
そういう意味のことを伝えようとして、けれど、イルファがいるから慮ってくれたのかもしれない。
(そう、だよな。アシャがラズーンへレアナ姉さまを呼び寄せることもできるかもしれないし)
この宙道(シノイ)がどこまでどれだけ通じてるかは知らないが、ラズーンの神々は、その気になれば、セレド近くまで通じさせることもできるのかもしれない。
ならば、この旅は本当に、諸国の『銀の王族』の資質を試し、篩にかけるものだった、ということなのかも知れない。
本当のところは何もわからない。
アシャも何も語らない。
だが、ラズーンへ行けば。
(全ての謎が解けるのだろうか)
そして、旅は終わり、ユーノとアシャは全く違う人生に踏み出して行くことになる。
(もう、触れ合うことさえ、なく)
数々の甘い思い出が胸を掠め、切なくなる。
(そうしたら、この気持ちに、少しは整理がつくのだろうか)
吐息をついたユーノは、隣のアシャがそっと彼女を見下ろしたことに気づかない。
苦しそうに唇を噛む、その仕草が、間近に居ても触れることができない愛しい者への想いをこらえるものだとも。
宙道(シノイ)は、二人のそれぞれの想いを呑み込んで、返そうとはしない。
ただそれは、深く遠く、遥かなラズーンへと続くのみだった。